

東京国立博物館蔵『將軍記』翻刻（その三）

——豊臣秀吉伝 下之二、下之二、下之三——

長谷川 泰 志

前 言

本稿では、「東京国立博物館蔵『將軍記』解題と翻刻（その二）

——豊臣秀吉伝上之一、上之二——」（本誌前々号第二十卷第一号

平成九年六月）、及び「東京国立博物館蔵『將軍記』翻刻（その二）

——豊臣秀吉伝中之一、中之二——」（本誌前号第二十卷第二号平

成九年九月）に引き続き、「豊臣秀吉伝」下之一、下之二、下之

三の翻刻をおこなう。内容は、中之二に続いて朝鮮陣が中心となる。

底本に使用した東京国立博物館蔵本は、管見に入った寛文四年版

『將軍記』諸本中、唯一浅井了意の署名「瓢水子松雲処士」を有す

る完本であり、本書の提起するさまざまな問題点については、既に

前々号の書誌、解題で記したので御参照いただきたい。翻刻に際しての凡例についても同様である。但し一点附言すると、今回翻刻の三冊の内題はすべて「本朝將軍記」であるが、便宜上、上巻中巻に做つて（）内に下之一、下之二、下之三と補った。今回で「豊臣秀吉伝」の部、上中下三巻七冊の翻刻を終了し、次号以降継続して『將軍記』の他の部の翻刻を掲載する予定でいる。

尚、この「豊臣秀吉伝」と、『太閤記』（小瀬甫庵）、『豊臣秀吉譜』（林羅山及び読耕齋）がいかなる関係にあるかについて言及すべきところであるが、本稿では紙幅の余裕なく、別稿を用意する予定である。

翻刻

本朝將軍記（下之一）

豊田秀吉伝之下

文禄二年正月、秀吉公、名護屋にして御越年あり。諸大名、元日の賀儀申す。城州八幡の暮松新九郎、年頭の御礼に下向せしかば、秀吉公仰せに、我猿業を習ひてみづから慰とし、又、諸軍在陣のともがらをも心をのぼさせんとおもふと。暮松大に感じ奉る。諸臣みないはく、秀吉公、年すでに闌給へり。只おなじくは止給へかし。さこそをこかましからめと。されども暮松をめしけるに、弓八幡は天下をおさめ民をめぐむ能なればとて、これよりをしへ初まいらせて、五十日の内に五番（一オ）の仕舞を習ひ給へり。近習伽衆に、仕舞のよしあし、扇のさしひき、つゝまず申上べしと也。すでに習ひ熟せられければ、舞台にして御能ありしに、見るもの大に感じほめ奉る。こゝにをひて、大名諸士相共に舞曲をなして慰み給ふ。暮松かくて御いとま申ければ、秀吉公、すなはち金銀小袖をあたへて返さる。

大明の將軍李如松、軍兵五万騎を率して安定館にいたる。朝鮮の軍兵おほくはよりて、廿万人に及べり。行長まづその軍を試がた

めに、軍兵を出したゝかはしむる所に、明の兵李寧といふもの、行長が小勢をしつゝみ、打なびかする。日本勢かなはずして七人（一ウ）生捕れ、残る兵みな城中に引入たり。小西行長、すなはち城を固くまもりて出ず。

李如松、軍兵をすゝめ、平壤の城を十重廿重にとりかけて攻る。平壤の有さま、東には大同江とて深く広き江あり。西北はみな山なり。南一方は平地につゞきて城の外二里計に牡丹台あり。台の傍に柵をふりて砦の要害とす。平壤の城中はわづかに一万五千人なれども、死を一举になして防ぎければ、攻落すべきやうもなし。李如松、楊元、張世爵、軍兵をすゝめて、まづ牡丹台の砦をせめおとせとて、をしよせせめのぼらんとす。日本の軍兵、よくこれふせく。李如松等、すなは（二オ）ち呉惟忠をもつて牡丹台をせめさせ、その外の軍兵はみな平壤にむかひて攻けるに、行長いはく、小勢をもつて大軍を破るには夜討に如はなしとて、夜半に兵を出して襲げれとも、中／＼かなはずして城に帰る。

次の日、寄手三方より一同にすゝみ、かづきつれてせめのぼる。小西行長、力をはけまし、手賦してふせぎければ、大明の軍兵せめあぐみて、少引色にみえければ、城中城戸をひらきて突て出つゝ戦かふ。城の西の手に、ふせく兵すくなかりけるを、張世爵これを察し、南兵一万人を率して急にすゝみてせめ入つゝ、時の声を揚たりければ、大明の軍兵、すはや城はせめ落さるゝ（二ウ）ぞ、すゝめや

／＼とて、同勢おなじく打てのぼる。そのいきをひ、まことにふせぎがたし。小西行長、ふせぎかねて諸軍を引あげ、本城にこもる。李如松、つゞいて本城をせめしむ。城中今はのがれぬ所なり。心静かに敵を打とて、鉄炮を多勢の中へ打出すに、をよそあだ矢はなかりけり。寄手打立られてゆらへたり。日すでに暮にければ、攻口をぐげ、明日はかならず攻落すべしと、李如松等大にいさむ。小西行長が兵、一千六百余人うたれ、明の兵も四五千はかり死けれども、寄手は更にいたむ事なし。初め行長、大明の軍兵多勢にて来ると聞て、使を大友義統、黒田長政、久留米秀包がもとに(3オ)つかはしていはく、大明、廿万人を率して近日我が平壤をせめんとす。いそぎ後詰せらるべし。ゆめ／＼をこたり給ふべからずと也。然るに、大友義統、素性物よはく臆せし人なれば、相すくふべき心なく、結句、大明廿万騎の大軍を聞て大におそれふるひつゝ、すでに大軍かくのごとくならば、小西行長うたれんに治定なり。なましひなる加勢して、用なき死をせんよりはとて、大友義統はとる物もとりあへず、朝鮮の王城さして逃かへる。黒田長政、久留米秀包も、手勢のすくなき故に来らず。まして、その道に大河あるをもつて、評議まぢ／＼なるに、日をかさねてつゝに決せず。(3ウ)

〔挿絵第一図(4オ)〕

かくて小西行長、城中の兵を檢るに、或は死し或は痛手をひ、又は落うせて、残る兵わづかに五千許也。行長がいはいはく、加勢は来らず。



挿絵第一図

城兵は少し。明の大軍をふせぐべき事かなふまじ。又、いたづらに打死せんよりは、軍はこれにかざるべからず。只まづ落て重ねて謀にはしかじとて、その夜ひそかに城を出て王城に帰る。李如松、これをは夢にもしらず。未明にとりかけて本城をせむるに、城中更に一人もなし。李如松、大にくやみていはく、昨日急にせめ落すべきを、行長をとり逃ける口おしよとて、軍兵を分て追かけしかども、はや行長は王城に帰入ければ、むなしくして引返す。(4ウ) 行長すでに王城にかへる時、長政、秀包が砦に立よりてかたりけるは、李如松が大軍をし来らんとす。はやく我と共に王城に帰れと。長政、秀包こたへていはく、いまだ敵の旗をだに見ずして聞逃せば、

武父にあらず。足下は粉骨をつくし給へば、まづ速に帰り入給へ。我等二人は小早川隆景が陣にくはより、三人同心して大明の兵と戦かひを決せんと。行長いはく、それは御心次第也とて、さしても強ず。増田長盛、石田三成、大谷吉隆の三奉行は、小西行長が平壤の難義に及ぶよし、はやく王城に帰るべしと也。隆景こたへていはく、我渡海して此地にきたるよりは、命生て二た（5オ）び日本に帰るべしとは思はず。今、明の大軍に逢て太刀の鋒より火花をちらし、馬の蹄に敵軍を蹴たて、箭をもいとはず、矛をもいたまず、大軍を物ともせずして、命を戦場の草の露とおとさん事、これ老後の幸也。いづくにか立のくべき。たとひ我が死したりとも、何のうらみかあらん。百万の大軍来りむかふといふとも、我一足も後には退まじきものをとなり。使帰りて此よしをいふ。増田、石田、これを聞て少しは恥る心ありていはく、大河を渡りて大敵に戦かはん事は、これ上策の武勇にはあらず。又、隆景をうちすて、帰らんも難義也と。大谷がいはく、我かならず隆景を帰り入（5ウ）せんとて、みづから行てさま／＼いひければ、隆景が心服して大谷と打つれて王城に帰る。

加藤主計正清正は、軍兵を兀良哈の境に出して村里をとりかすめ、城を金山に築て、加藤与三右衛門に軍兵二千をそへてこめをき、又一城を橋中にかまへて、九鬼四郎兵衛、天野助左衛門、山内甚三郎に三千余人の兵をそへてこめをき、清正は威鏡道にいたり、百姓等

をあはれみ酒肴をあたへらる。百姓等大によるこぶ。此故、人みな清正に思ひ付たり。かゝる所に、盗賊等蜂のごとくにおこり立て、清正が釜山浦に帰る路をきりふさぎけり。王城にある諸大將達、いかにして清正をよびとらん（6オ）とす。浮田秀家、その家老三人の連署をつかはし、速王城に帰られよと也。清正、こたへていはく、我も帰らんと思ふ心ありといへ共、金山、橋中両城にこめをきし軍兵どものすてがたければ、これらをも引つれてこそ帰らめとて、清正それより威鏡道を打立て、斎藤立本、庄林隼人、龍造寺又八郎、その勢五千人をつかはして、金山の城加藤与三右衛門を迎へしむ。清正、跡より繼てすむ。斎藤立本、庄林隼人等、すてに金山にいたる時に、盗賊等おこりて金山をとりかこむ。斎藤、庄林、此よしを見て鞭をあげてはせよせ、急に後よりせめかゝれば、盗賊等敗北して打るゝものはなはだおほし。立本、隼人（6ウ）等城に入て与三右衛門を尋れば、敵と戦かふて打死したりといふ。立本、隼人、大に憐嘆き、その屍を灰になして帰る。其後清正、軍兵を率して盗賊等をせめ平け、金山、橋中の城兵を合せて打つれて王城に帰る。

李如松、十万騎を率してすゝみて、開城といふ所にいたり、王城の有さまを聞うかぶひ、戦を決せんとて、忍びをいれて窺はするに、張通事といふもの、李如松にいふやう、日本の武勇ある者どもは、みな平壤の軍にうたれたり。王城にあるものどもは、これよはき臆

病の軍士等にて、物の用に立べくもなし。おそるゝにたらず。これを「(7オ) 攻下して大功の名をあげん事うたがひなしといふ。李如松、まこと也とおもひて南兵をば開城にとめて、大明の軍兵はかりを率して、高昇、孫守廉、祖承訓等二万人を前陣とし、朝鮮の兵を後陣にたて、開城の大河を渡り、碧蹄館といふ所につく。小早川隆景先陣として、立花左近將監宗茂、久留米秀包、筑紫侍従等、これにくはゝりて評定す。敵すでに開城にありといふ。さだめてこれへよせ来らんかとて、斥候をつかはして見せしむ。一夕、立花宗茂が兵、李如松が兵と行合て打合たゝかふて相引にす。夜明がた、はるかに見渡せば、一里計むかふに大軍むらがりておびたゝ」(7ウ) しく、備をとゝのへて、只今すゝみ来らんとす。王城の諸大将、をのゝ先陣をあらそふ。小早川隆景がいほく、某思ふ子細あり。前陣は我にせさせよ。日本と大明の大事の戦かひは今日にあり。我年老たりといへども、他人に先陣はゆつるまじといふ。諸將うけがはず。隆景しめて望みければ、石田、増田、大谷三奉行、さらば先陣は隆景にゆづり給へとあり。諸將此うへはとて、その義にしたがふ。隆景、わが人数をわかつかつ。一陣は栗屋四郎兵衛三千人、二陣は井上五郎兵衛三千人、三陣は隆景一万騎にてをしいだす。立花左近將監宗茂二千五百人、久留米秀包、毛利大蔵少輔元康六千騎は遊軍となり、横合にかゝ」(8オ) らんと、備を隆景か陣の傍にたてたり。李如松が前陣、高昇、孫守廉、祖承訓等と、栗屋四郎兵衛と、

相戦かふて、栗屋引退ぞく。井上五郎兵衛入替りて戦かふ。大明の兵、いきをひかゝる。井上、大音あげて軍兵をすゝめていはく、土の戦場にのぞむ事は死するをもつて本意とす。逃て生るは恥なり。只一足もすゝめやものども。千騎が一騎になるまでもひくなゝと下知して戦かひしかども、さすが小勢なれば、大軍なびけがたくて、井上すでに敗北せんとす。その時、立花宗茂、毛利元康、鼓をうち、馬をすゝめて急に横合より打てかゝり、魚鱗に立て中を衝破、大明の兵、中をあけてひらかんとす。」(8ウ) 小早川隆景これを見て、兵をすゝめ打てかゝり、四角八方にかけめぐり、雷のごとくはしり、電のごとくひらめきければ、李如松も軍兵をすゝめて相戦かふ。李如松、李如梅、李寧、李有昇等、おなじくすゝみてたゝかふ。たがひに汗馬の息をもつがせず、追つ返しつ入乱れて、已より午の剋にいたるまで勝負はなし。隆景が兵ども、明の大将李如松をうたんと目にかけて、突のけゝすゝみかゝる。李有昇、かけ合ゝをしへだてゝ、手もとにすゝむ日本勢數十人切ふせ、つゝに鉄炮にあたつて馬より落て死たり。楊元は王城の軍、大明急なりと聞て開城よりはせ来る。」(9オ) 李如松、あら手の加勢に力を得て、又すゝめて打てかゝる。隆景、宗茂、元康、力を合せて大に切てまいるに、大明ひらき乱れてくづれ立けり。李如松、馬より落ておきあがらんとする所を、井上五郎兵衛、これ大将也と見しりて、すきまなく馬をかけよせ、すでにうたんとせしかば、大明の軍兵百余人あつまり、

李如松を他の馬にたすけのせて、敵すゝめば突はらひ／＼落引けり。井上、その心ざしをとげざることを口惜く思ひ、齒がみをして悔怒る。降景、宗茂、元康等、勝にのりて追かけしかば、明の軍兵、開城河におぼれ流れて死するもの数しらず。」（9ウ）

〔挿絵第二図（10オ）〕

すべて今日の軍に明兵死する者一万余人に及ぶ。日本の諸将みないはく、李如松、今は創ぬらん。軍兵等、臆病神のさめぬうちに、勝にのりて追うたば、心のまゝに打とらんものと。降景とよめてはいはく、小勢をもつて大軍を追れん事、もし喰かへりて打てかゝらばゆゝしき大事なり。弓矢しまりたる良将はさもなき事ぞやと。これに



挿絵第二図

よりて王城に帰る。

李如松は、小早川隆景が武勇にをくれをとり、すでに軍兵を引らはんとせし所に、南兵のあら手、鉄炮五百挺をもつてはせくはゞりしかば、李如松力を得て開城に墮へて陣どり、大明の加勢を待居たり。」（10ウ）

日本の諸大将みないはく、大明の軍兵、まことにおそるるにたらず。いざや開城にをしよせて一攻せめんといひしかども、大明廿万人、なを開城にこもりければ、さすが大軍なるに心をきてみだりに兵を出さず、明の兵のよせ来るを待てとゞまりぬ。

王城の西南にあたりて大河あり。川端に数十間の倉あり。兵糧数万石をこめて、王城の諸將、今年の支度とし、近きあたりの柴木をきりとりて薪とす。

安南府に両山あり。山の間に沼あり。後は山峻く、いはほそはだち、二方は沼ふかくして馬のあしたゝず。南の方は大河みなぎり流れ、西の方は山道ほそく、開城にゆく」（10オ）道なり。大明の兵、こゝに砦をかまへ、柵をふり、柵の内には石垣たかくして、兵おほくこもれり。王城の諸大将、開城の軍に達ざる事を残りおほく思ひ、此砦を攻とらんとて、石田、増田、大谷に評定す。これを聞て、すなはち二万余騎を率し、諸將にも牒し合せず、山の峰に取あがりて城中をうかゞふに、兵糧を炊く煙もみえず、人の声も聞えず。増田右衛門、加藤遠江守、長谷川藤五郎、木村常陸介等、大にうたがひ

あなどり、をのくよき兵十余人をつかはしてこれを見せしむ。漸城下にすゝみて見聞に、城中物さびて静なり。こゝにをひて軍兵一同につめよせてせめのぼらん(11ウ)とす。城中の兵をり合て、大木、大石をなげかけてふせがんとす。増田、加藤等、みづから旗あげて軍兵をすゝめ、柵を引のけ、外郭を打破る。城の兵おどろきて矢をはなつ事雨のごとし。これに射しらまされ、増田等急にはせめ落す事かなふまじとて、軍兵を引いれんとす。城中機にのりて打て出つゝ、追かけ半弓をもつてこれを射る。増田、加藤等、大に乱れにぐる。隆景、清正、行長、みなはいはく、増田、加藤等、さだめてをくれをとるべし。いざ行てむかへんとて、兵を率して打出たれば、追かくる城の兵とも、このよしを見て取て返し、城に入り。次の日、小早川隆景等、斥候を(12オ)つかはして見せしむるに、城中に軍兵一人もなし。みな落うせて開城にかへりぬ。昨日、増田等をしよせて、柵を引のけ外郭を打破りたる時に、城中臆病の者共おそれてみな逃はしり、南大河におほれて命を隕し者、数をしらす。若二たびよせて攻るほどならば、城中は塵にならんものをと、増田等悔みけれども益なし。隆景これを難じてはいはく、此城落たりと聞ば、李如松等も開城に足はためまじきを、をし返して又せめざる故に、城を退ける口おしきよといへり。

増田右衛門尉、石田治部少輔、大谷刑部少輔、連判して(12ウ)書を名護屋につかはし、平壤、開城川両度の戦かひを告たり。秀吉

公、ふかく隆景、宗茂が軍功を賞じ、感状をつかはさる。又、大友義統が臆病病のつきて小西行長が平壤の急難をすくはざる事を、秀吉公、大に叱てのたまはく、これ武士たるものゝ心にはあらず。日本に恥なり。武士たるものはよく武道をたしなむべし。義統に似ることなかれと也。

二月、近衛前左大臣信輔公は、朝鮮の有さま御覧せんため、頻りに渡海の心ざしおはせしを、帝聞しめし、これをとゞめ給ふ。秀吉此由聞いてはいはく、無益の尤はなはだしきは此事也とて、徳善院をもつて、渡海の(13オ)事御無用なるべしと申させらる。こゝにをひて、より御宸筆の勅書を名護屋につかはし給ふ。秀吉、これを頂戴して大によろこび給へり。此故に近衛信輔公、思ひとゞまり給ふ。

李如松、使を大明の京都につかはしてはいはく、近比、日本將軍関白秀吉、みづから廿万騎の軍兵を率して糧をとき、帆をあげて朝鮮に來ると。大明大におどろきさはぐ。宋応昌がもとより劉綎、陳璘に飛脚をたてゝ加勢す。大明の帝、黄金廿万両を出して軍陣の用としてつかはさる。こゝにをひて李如松、すなはち李寧、祖承訓をもつて数十万騎を相そへ、開城を(13ウ)守らしむ。楊元は平壤より軍立し、李如栢は宝山に陣をとり、查大受は臨津といふ所に陣をとる。この時、備前宰相浮田秀家は龍山に陣どり、兵糧数万石をつみかゝる。查大受、すなはち死生不知の溢者をえらひ、閑道よりまはして兵糧蔵に火をかけて焼うしなはせけり。これより秀家、兵

糧乏なれり。

今春大夫八郎、觀世大夫左近、名護屋に来る。これ秀吉の召給ふ所也。秀吉公、かれらが家に秘藏する面を見んと仰せありける故に、持来りて見せまいらする。秀吉公、これをうつさせんとおぼしめす。

山城守治郡醍醐といふ所に、隅坊とてよく面をうつすものあり。

いそぎ(14才)彼をめしうつさしめらる。隅坊、命をうけて今

春家の名物、小面、般若、小尉、三光尉、觀世家の名物、ふかひ

面、鰐討、近江女等を十余日のあひだにうつしたたり。秀吉公、

比見給ふに、見わけがたく似たり。秀吉公大によるこび、大権現

利家に議して隅坊に銀五十枚を下され、模面の天下一の号を給はる。

隅坊は、会稽の錦を披て醍醐に帰りぬ。

三月、朝鮮王城の諸大將十万余騎にて、暫らく軍をとどめていたづ

らに数日を送る。加藤遠江守、細川越中守忠興、長谷川藤五郎秀一、

木村常陸介等、七人心を合せ、他の兵一人もまじへず、手の郎従都

合二万余騎を率して晋州におもむく。晋州は朝鮮名(14ウ)城の

第一として、王城を去事四日路也。初め、朝鮮国王李昭、王城を落

て義州にはしり、代々の宝物ども、みな晋州の城にはこびおさめて、

武勇の者二万人をこめて守らしむ。加藤、細川等、これをはしらて、

只軍兵わつかにこもれりと思ひあなどりて、さしも嶮山坂を二里は

かり、息をもつがず打こして、城下に付とひとしく、備をもたず、

をのゝ我さきにと城にせめいらんとす。城中には、寄手小勢なり、

此城を攻落さんとする事は、蟻螂が斧を挙て流車にむかひ、蚘蛉の

翅をもつて大樹をうごかさんとするかごとくならんといふて、軍兵

等、突て出つゝ急に戦(15ウ)かふ。加藤、細川等の七大将、散

々に打乱されて、日も漸暮がたになる。城の兵、勝にのり新手を入

替、おり重なりてすゝみしかば、七大将すゝみて戦かはんとすれ

ば、軍兵つかれたり。しりぞかんとすれば、山けはしくして引とり

がたし。進退こゝに谷たり。されども、勇気をはげまして進。敵を

打はらひゝ葛かづらにとりつき、山上にかゝぐりのぼり、傍々王

城に帰る。そのあひだにうたるゝもの数をしらす。こゝにをひて諸

大将評定していはく、かくのごとくにして日数をくくれば、秀吉公

さだめて我らを怒責給はん。軍難義のよし告奉り、加勢を請て李如

松を打とり、慶尚、全羅両(15ウ)道の城どもをせめとり、王城

と釜山浦との通路をひらくべしとて、書を名護屋につかはす。大明

の軍兵廿余万騎、開城にあり。味方わづかに十万人也。固王城を守

るといへども、彼等よく地形をしり、軍兵また日々にまさり、月

に重なる。これにては中々敵を壁にする事かなふべからず。こ

の故に、まつ試に晋州をせめさせけるに、城中兵おほくしてせめ落

す事かなはず。黄海、忠清の二道は手に入といへども、国民、所々

の險難にあつまりて通路を切ふさぎ、全羅、慶尚兩道を平げながら

も、味方往来する時は跡をきり、前をふさぎて妨ぐ。もし此道々

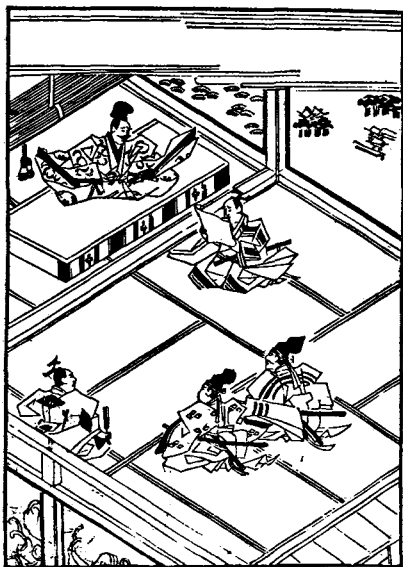
(16才)に砦をかまへて軍兵を入をかば、此妨げあるべからず。そ

れも味方に兵すくなき故に、人数をわけてつかはしがたし。今加勢を給はらば、李如松と戦かひ、目の前に大利を得て、直に大明に攻いらん事何のおそれかあらんと也。秀吉公、その書を見てのたまはく、はやく軍兵をつかはせとて、安芸侍従毛利秀元二万余人を渡海せしむ。

そのうち、秀吉公と 大権現、及び前田利家と昼夜軍評定して、加勢をおほくつかはさんとす。しかれども名護屋に陣の軍勢わづかに十萬騎あり。これをわかちてはつかはしがたし。」(16ウ)

〔挿絵第三回 (17オ)〕

京都守護の軍勢もおほしいへども、これも猶わかちてつかはしが



挿絵第三回

たし。大坂の城守護の兵はわづか也。又日本の固も大事なれば、種をつくして朝鮮に加勢すべき事もかなはず。されば今は朝鮮につかはすべき兵なし。こゝにをひて秀吉公、涙をはら／＼と流してはいはく、口おしき事かな。我小国に生れて大將軍たりといへども、軍兵の数すくなうして大明を足の下に履したかゆる事のかなはざる事よとて、遺恨ふかく思ひつめて、齒を切手を挙て立給ふ。これを見聞けるともがら、みなその大機なることを感ず。

岐阜中納言秀信ひでのぶ、朝鮮より名護屋にかへり」(17ウ) 来りて、浅野左京大夫 幸長が家に入て、それより秀吉公に对面あり。浅野幸長朝鮮國に渡海せしに依て其家に入給ふ秀吉接待して慰勸にもてなし給ふ。

丹波中納言秀勝、御見舞として名護屋に來り、秀吉公に調せらる。秀吉ふかく恩顧あり。

四月、秀吉公名護屋にして猿楽の能をもよをし、諸將をなぐさめ給ふ。又、茶湯の興行あり。みなこれに陣退屈なるべき事を察して、諸軍を慰らる。

沈惟敬、すでに大明の京より開城の陣に來り、李如松に对面して、司馬石星が意を述て、和ぼくの事を談ず。又、小西行長がもとに行てあつかひけり。行長、(18オ) 去年沈惟敬に約して七ヶ条を立たり。一には、和ぼくの事。二には、日本すでに朝鮮の四道をせめたりたり。これを國王李哈に返さず、日本より領知すべき事。三には、朝鮮より運上入貢せん事、古しへのごとくすべき事。四には、明

の帝より秀吉公を日本の國王とあがむべき事。その余の三ヶ条は秘して世に披露なければ、人しらず。増田、石田、大谷、小西等、朝鮮在陣の久しきに苦勞退屈して、あながちに帰国の思ひ止かたし。

此故に沈惟敬がこと葉にしたがひ、和ぼくの議をこのむ。沈惟敬、いかにもして秀吉公をもつて大明帝の婿にせんと(18ウ)おもひて、しばしその才覚をいたす。そのうち惟敬と行長と約をなしていはく、行長いふ所の七ヶ条の事、みなうけがはゞ、朝鮮の二人の王子及びその臣下生捕のともからを返し送り、又、王城の諸大將及び軍兵みな王城をあげ渡して釜山浦に退て帰朝せよ。しからば李如松も兵を引て大明に入へしといふ。行長もとより和ぼくの事に張本たり。さりながら平壤の軍兵等と沈惟敬と内通の謀もやあるらんとおもひて、しかとはうけがはず。惟敬すでに大明に帰り、司馬石星とひそかに評義し、監生徐一貫、生員謝用梓を行長がもとにつかはし、金子綾羅をおほくをくりて和ぼくの(19オ)事を調しむ。小西行長及び増田、石田、小早川等、みな加藤清正と中よからず。此故に、清正が二人の太子を生捕ける大功をすてんがために、行長、長盛、三成、吉隆、一同に和ぼくの義よろしからんといふ。そのうへ兵糧やうやくともしく、軍兵等おほく瘡をふるひ、疫癘に逢て死するものすくなからず。此故に、みなまづ釜山浦に引しりぞかんとす。沈惟敬よろこびていよ／＼相はからふ。行長等、又評義していはく、朝鮮の王子をよくり返さん事は秀吉公の命にあらずは、はか

らひかたし。軍兵を退くる事は、増田、石田、大谷か意にまかすへしと也。増田等、すなはち廿一日をもつて軍兵を退くる(19ウ)日限とす。日本の諸大將、去年より王城に陣とりし故に、朝鮮の農民、商人、細工人、みな町家に帰り来りて、をのれ／＼が業をつとむる。それ日本軍兵の数よりおほし。これによつて、増田等評義していはく、もしこの農民、商人、細工人等、ひそかに大明の兵となれあひて、我ら引のく道にとりかゝらば、釜山浦にも足をたむる事かなふまじ。かの農民、商人等を追はらひてのちに、引のくべきや。たとひ追はらひたりとも、それをいかりて、かれらむらがりあつまりて妨は、追ざるかたまさらん。若又農民ばら一所によびあつめて、かたはしより打ころし焼ころしてのち、軍兵(20オ)を引はらはん歟。それも罪なきものどもを塵にせん事も不敏なりと、まぢ／＼にして一決せず。此時、小早川隆景は高枕して大軒かきて臥居たり。石田治部少輔三成、よびおどろかしていはく、諸大將評定まぢ／＼なるに、此中に寝入てこれをしらざる真似するや。今軍兵を引とるは大事也。よき分別あらば申さるべしと也。隆景こたへていはく、人／＼の仰せ悪からんとはあらず。我何事をか言を費さん。然れども、又一の謀あり。試に申てみる。悪からば打すて給へや。今それ諸大將の軍兵等、朝鮮の町人と打まじり居て顔をみしられたり。こなたには見知らず。その中に明、朝鮮の土も(20ウ)立まじりてあるべきか。まづ小荷駄等をさきなたて、次に火を陣とにか

けて、煙のまぎれに軍兵共を引とるべし。陣小屋、とももえあがらば、明の兵ども後につく事あるべからずと也。増田等、まことに此義しかるべしとて、火を陣や／＼にかけて焼あげ、煙のまぎれに引退。商人、細工人等の庶民等は、火をのかれんとて逃のがる。朝鮮の臣等、李如松が陣にいたりていはく、日本の兵すでに退帰る。追かけて打とめば数をつくしてほろぼすべきといふ。李如松がいはいく、孫子が詞に、帰る師をば退ることなかれといへり。もし食返して打来らば、味方大なるをくれをとるべし。そのうへ臨海、順和二人」(21才)の太子生捕れてあり。彼日本の兵を追うたば、太子二たび国にとり返ししかたかるべき也とて、後を追はず。

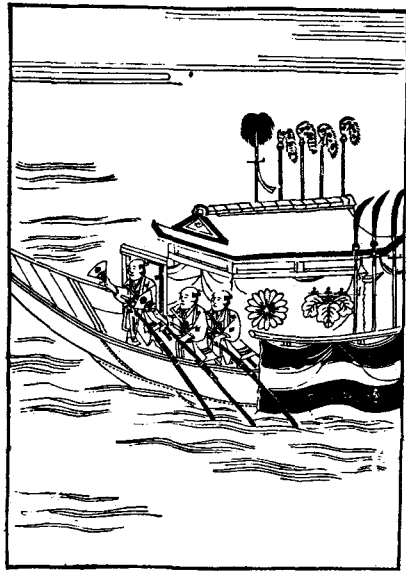
日本の諸大将、すでに軍を返して善山府、釜山浦に陣とりて、大明の使者を相待所に、沈惟敬と徐一貫、謝用梓と共に名護屋に來り拜謁す。秀吉大によるこびて、羽柴下総守勝雅を、東照大権現及び前田利家につかはしてのたまはく、大明の両使をもてなさるべしと也。こゝにをひて謝用梓は、大権現の陣にいり、徐一貫は、利家の陣に入たり。

五月に、謝用梓、徐一貫、大権現、利家の陣にありて、毎日そのもてなしにあふ。その後、秀吉公、浅野弾正小弼、(21ウ) 太田和泉守、建部寿徳、小西如清、近江観音寺をもつて替る／＼、両使をもてなさしめ、その後、秀吉公、大明の両使をもてなし、教猷の後、秀吉公より太刀一腰、白銀千枚、小袖廿重、帽子三十を両使に給は

り、白銀五百枚、帷子百、羽織百をその郎従に給はる。又別に白銀三千枚、金作長刀一柄を沈惟敬に給はる。名護屋は地形まがり登て、入海めぐりて百町計、風景尤すぐれておもしろき所也。大明の両使はなはた愛してをの／＼詩をつくりて意をのぶ。秀吉よろこびて大明両使の心をなぐさめ、興をもよをさせんとて、数百艘の舟を海上にをしうかへ、家の旗をたて、紋つきたる幕(22才)はしらかし、塩風に吹もませ、三老棍をうごかし、棹の歌をあげらる。秀吉公も舟にめさる。虎革のなげ鞆さしたる鍵三百本、金作の長刀五十柄、舟につきたて、歩衆三百余人、一樣に舊の羽織を着して御供す。秀吉公、舟の中にして酒宴あり。觀世、金春をめして猿楽の能あり。両使大に興をもよをす。次の日、秀吉公、両使に茶を給ふ。かくて両使御いとまを申す。秀吉公、書をつかはさる。そのおもむきは、和ぼくの議もし偽なくは、我なんぞ誓約をかへんや。しかれば大明皇帝の淑女をむかへて本朝后妃の位にそなへん。兩國久しく不通敵対する故に、近年勘合の舟をくらず。(22ウ)

〔挿絵第四回(23才)〕

今もし和平あらば、必ずこれをつかはすべし。和ぼくなりて後、兩國の臣等ともに誓約のこと葉を通せむ。我去年より武勇の將數輩をつかはして朝鮮を征伐せしめ、王城以下打平げ、人民おほくころしぬ。貴国、今我が言をうけがはぶ、朝鮮八道のうちを、四道は李哈に返し、四道は日本の領地とせん。しからは朝鮮王の子、及び臣



挿絵第四回

下一二人を日本に質となし給へ。去年、わが將兵加藤主計頭清正、すなはち朝鮮の二人の王子を生捕れり。沈惟敏ねんごろに請もとむ。此故に今返しつかはす。我謂はく、朝鮮の貴族数輩、世々日本にそむくまじといふ。誓約の書をいたさば可ならんと也。謝用梓、徐一貫、これをもちて」（23ウ）帰る。秀吉公、すなはち内藤飛騨守、藤原如安をそへて大明につかはさる。又、小西行長、増田長盛、石田三成、大谷吉隆に書をつかはしていはく、朝鮮の二王子及び郎徒を本国に返すべしと也。これによつて臨海君肆、順和君輝の二人の太子を朝鮮の王城に返す。李昭も義州を出て王城に帰る。朝鮮の人民、今は安堵の思ひをなして、みな家々に帰りすむ。沈惟敏大によ

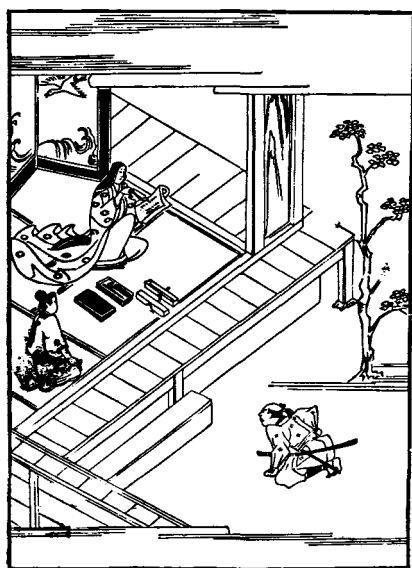
ろこび、まづ使を司馬石星につかはす。石星そのあつかひよくいたして、和ぼくの功を立てたる事を賞じ、大明帝にすゝめて恩賞厚おこなはれ、沈惟敏が威勢富貴なる事、世の人うらやみけり。」（24オ）秀吉公、福原右馬助、熊谷内藏允を朝鮮につかはし、諸大將に心をそへ、大友義統を責ていはく、先陣の諸城も急難あらば加勢すべくすくはんがため、子城を所々にかまへさせしに、小西行長平壤の急難に義統これをすくはず。剩大明の軍兵多勢なりと聞て遽ふためき逃たる事、前代未聞の臆病者也。尤罪科はなはだおもし。抑秀吉公数十年前のかた、武道をもつて業とせしに、我が手の兵、一度も敗北の恥なかりき。しかも今、我大明と兵をかまへ、相挑む所に、義統初めて逃たり。これ身独りの恥のみにあらず。秀吉が過にして日本の大なる瑕なり。我義統が首をはねばやおもふ事、千たび百たび」（24ウ）胸に涌みつるといへども、大友家は頼朝よりこのかた代々相伝して継来れり。我この故に有ゆるして死す。又そのかみ義統と島津と合戦に及びし時、我に加勢を請けるを、我見つぐべき好なく、相知べき子細はなしといへども、我武道の大將となり、人の望みを達せずは武門の本意にあらずと思ひ、早速に加勢をつかはさんとせし所に、我が加勢をまたずしてたちまちに戦かひて、島津かために大なるをくれをとりにて、我が城にも帰り入事かなはで、妙見龍王に逃こもりける事は、智慮の拙といひ、大臆病といひ、武士たる者は同座する事をも恥かしく思ふべき也。次に、先年、

諸大名、禁中」(25才)昇殿の時に、義統切に我が姓を望む。我いはく、大友は久しき家也。いかでかわが姓をゆるしあたへんといひしかども、しめてねんごろにいふに依て、つゝに豊臣の姓をゆるし、その加階も五三人の他には尤高し。我今義統を罪して安芸宰相毛利輝元にあづくる所也。義統が子もおなじくあづくべしといへとも、我身ちかくつかふる事久し。その性また父には替りて暁ものなれば、ゆるしをく也。武家を事とせば、父の恥に面をけがされなん。只禁中にめしをかれん歟。天氣をうかゝひ申入べし。そのほど加藤肥後守に預をく扶持方五百人分を相渡すべし。義統堪忍分の事は、重ね」(25ウ)て命付らるべしと也。

又、島津又七郎を責ていはく、その身すでに島津兵庫頭義弘に屬して諸事其はからひにしたがふべき事なるに、さらに義弘に屬せず。これその心を察するに、義弘はふかく武略をたしなみ何時も唯先陣を心にかくる者也。又七郎、さきがけをきらひてこれをのがれんとする成べし。次に、海辺に陣をとる事をこのむ。これ、味方もし朝鮮に打まけなば、はやく舟にのり人よりさきに逃のびて急難をのがれん為成べし。まことにこれ勇者の疾と、臆病者のする事也。次に、先年、我九州に出陣の時に、又七郎何の忠節はなかり」(26オ)しかども、義弘ふかく望む故に本領相違なく安堵せしめ、其上京都普請役、関東の陣役をゆるす。その厚恩をわすれて野心をおこさんとす。固に罪科いたりてふかし。次に、その身の事、十人計を

めしつれ、小西撰津守行長がもとにあるべし。堪忍分の事、重て命付らるべしと也。

又、波多三河守を攻ていはく、三河守は、我すでに鍋島加賀守直茂に付たりしを、直茂とおなじく軍を出すべきを、直茂にはしたかはずして、潜に熊川の辺に陣とる。大臆病のいたり、勝てかぞへがたし。次に、名護屋は波多が領内也。我今旅屋の館をかまゆ。三河守は人よりさきに能越べき所ぞかし。唯、舟着を便り、若やの時節」(26ウ)を相待ける。真に憎へし。次に、諸軍勢、朝鮮の王城を出て釜山浦に引退時、三川守その道に出むかひ、諸大将とおなじ働なるやうにその品をつくるひける。猛惡の比興者、磔にかけ、轆にしても余りあり然ども、怒をさへて命をゆるす所也。次に、先年九州征伐の時、我が本領改易すべき所に、鍋島加賀守さま〳〵佗言せし故に、相違なく安堵せしめ、京都の普請、関東の陣役、みなゆるしける。その恩を忘れて今かくのごとし。黒田甲斐守長政にあづけるゝ所也と。諸大將衆もつゝしみてこれを聞申さるべしといへり。小野撰津守は島津が家臣也。一の娘あり。菊と名」(27オ)づく。龍造寺が從臣、瀬川采女正が妻となれり。采女正も渡海して朝鮮にいたる。菊子は、さびしき闇のうちに、孤臥て采女正を恋悲しむ、一日片時もわするゝ隙なし。其思ふ所を文に記て文篋におさめ、便船にことつてつかはせしに、その舟逆風に打覆され、文篋は博多の浦に波によせられしを浦人とりて代官にまいらす。これを秀吉公



挿絵第五図

の近習にをくりけるを、秀吉公、すなはち山中山城守に封をきらせ
て読めらるゝに、貞女夫に寄る書也。手うつくしく心ふかくかきな
しける文の有さま、世の常ならず。聞人涙をながす。端書に哥あり。
かくあらん行衛をしらて頼みつるわが心をばたれにかこたん
〔挿絵第五図(28オ)〕

これ、菊子が瀬川采女正に贈る文なりと。秀吉公、その心ざしふか
き情をあはれがり給ひ、龍造寺に人をつかはし、采女正を帰朝せし
め給ふ。采女正、肥後に帰る。菊子大によるこび、夫婦つれて名護
屋にまいり、秀吉公の御情有がたきむね、謝し申す。尼孝威主と
次申けり。秀吉公、夫婦に御対面あり。菊子、又短冊をささげ奉る。

物ことのあはれをめぐむあまつ神の心にかはる君のたゞしさ

秀吉公、御引出物給はりて返し給ひき。

秀吉公、書を石田三成、増田長盛、大谷吉隆、加藤清正、小西行長
につかはしていはく、釜山浦近辺の要害を固く守るべし。大明の和
ぼくの事、若いつはりならば、軍(28ウ)をすゝめて王城をせめ
おとし、大明に入べし。晋州の城は、先日せめおとさざりし事、大
なる遺恨也。諸大將相図をさだめて一挙にせめおとすべし。又まづ
所々の要害をよくかまへて然るへし。釜山浦の本城、及び椎木
島、登萊の三所は、毛利秀元その兵一万七千六十人にて守るべし。
熊川の本城は、小早川隆景その兵六千六百人、側城は久留目秀包そ
の兵四百、立花宗茂その兵千百卅三人、筑紫上野介其兵三百卅人、
高橋主膳正その兵二百九十人、これを守るへし。唐島は、蜂須賀阿
波守家政その兵四千五百、生駒雅楽頭その兵二千四百五十人、長
曾我部元親その兵二千五百九十人、福島左衛門大夫正則その(29
オ)兵二千五百人、戸田民部少輔その兵二千三百四十人、これを守
るべし。加徳島は、九鬼大隅守嘉隆その兵八百卅四人、加藤左馬助
嘉明その兵三百四十四人、脇坂中務少輔安治その兵九百人、来島助
兵衛尉その兵四百五十八人、菅平右衛門尉その兵百六人、これを守
るへし。加藤主計頭清正其兵六千七百九十人、及び相良宮内少輔、
薩摩侍従其兵二千百廿八人、黒田甲斐守長政その兵五千八十二人、
鍋島加賀守直茂その兵七千六百四十二人、小西撰津守行長その兵七

千四百十五人、及び宗対馬守義智、松浦法印鎮信、有馬修理大夫、大村新八郎、宇久大和守、その外、藤堂佐渡守高虎その兵千四百七十三人、堀内安房守」(29ウ) その兵五百七十四人、桑山小藤太その兵五百四人、毛利宍岐守その兵千六百二十一人、高橋九郎その兵七百四十一人、秋月三郎その兵三百八十八人、伊藤民部その兵七百六人、杉若伝三郎その兵百八十五人、相代て本城十一、側城七所を守るべきものなり。その外、城の要害、砦の修造、兵糧の出入は、その人をさだめ毎事必ず名護屋に告しらすべしと也。」(30オ)

本朝將軍記(下之二)

六月、朝鮮の二王子及び臣下等、書を加藤清正が家臣、加藤右馬允がもとにつかはして清正に披露せしむ。その書のおもむきは、朝鮮国王の二王子、臨海君、順和君、兩府夫人等、壬辰の年四月廿四日、日本大將軍主計頭清正に生捕れたりしを情ふかくもてなし、関白殿下秀吉公に申て釜山浦より二たび王城にをくり帰さる。その慈悲は仏のごとし。固に清正は日本の名将なり。素より聞つたへし関白殿下は、武勇ならびなく、智謀兼そなへて諸国みなおそる。又、仁慈あり。我ら、日本関白殿下及び主計頭に対して違背の意あらば人情にあらじ。」(1オ) 天地鬼神、みなよくしるべしと也。清正これを得て家の珍とす。

秀吉公、書を朝鮮在陣の諸大將につかはす。浅野弾正、黒田如水、これをもちてゆく。其おもむきは、前日、諸大將晋州をせむるといへども、城主牧司よくふせぎて是をおとすことあたはず。このたびは、諸將ひとしくすゝみて晋州を破り、牧司が首を我に見せしむへき也。今、浅野弾正、黒田如水をつかはす。をのく軍の事相談あるべしと也。浅野、黒田、すでに朝鮮にいたり、増田、石田、大谷に書ををくり、渡海の旨を告る。増田等、このよし聞て、まづ備前宰相浮田秀家がもとに行て告たり。」(1ウ) かくて浅野、黒田は、秀家に対面して秀吉公の命をのべて帰る。増田、石田、大谷、すな

はち使をつかはして渡海苦勞のよしはいせらる。弾正、如水兩人、相むかふて囲碁をうちて耳にも聞かれず。しばらくありて、増田等三奉行来りて、はる／＼渡海の御苦勞察し入たるよしいへども、浅野弾正、黒田如水、一向耳にも聞かれず、目も見やらず、只征点劫をたつるなど、ふかく案じ入て余念なし。秀吉の命、口上の子細をもうけたまはらんがためおもむきける所に、かくのごとくの有様なれば、石田、すなはち増田、大谷に目加して潜に出て帰る。弾正も如水も、猶これをしらず。碁を打おさめ、「(2オ)石を碁筭に入てのち、初めていはく、三奉行こゝに来らば秀吉のおほせをかたらんと。郎従どもいはく、三奉行すでに帰り給ふと。弾正、如水、大に驚き、使をはしらかしてよび返せども、三度に及びても立帰らず。叱ていはく、その我らに逢んよりは碁をよく打給へとて、終に立帰らず。こゝにをひて弾正、如水は、人の嘲、取沙汰をおそれ、又、秀吉公の聞いていかり給はん事を憚る。然れども、増田等、つゐに對面せず。此故に、弾正、如水は力なく秀吉公の命を諸大將衆に申渡して帰る。案のごとく、此事秀吉聞給ひて、浅野、黒田がをこたりて無礼なる事をいかり給ふ。ある人かたられし」(2ウ)は、増田、石田、大谷、ふかく弾正、如水が碁に打入て傍若無人のふるまひをにくみ、秀吉に讒し、さき／＼人に逢ふこと此事をかたりて、大に手をうちてわらひあざける。弾正、如水、はなはだこれをうらみしが、弾正が子左京大夫と、如水が子甲斐守聞て遺恨におもひ、三奉

行をにくむ事、怨敵のごとし。秀吉薨じ給ひて後に、左京大夫と甲斐守と二人して、三奉行の悪逆を、大権現に訴し後に、又、関が原の陣に石田、大谷、誅せられ、増田は禁獄せられてこそ、二人はいきとをりを散じけれ。

諸大將一味して晋州をせむる。加藤清正、小西行長「(3オ)先陣たり。毛利秀元は一方にむかふ。小早川隆景、黒田長政、浅野弾正、伊達政宗等、これに属す。浮田秀家一方にむかふ。島津義弘、鍋島直茂、長曾我部元親、蜂須賀家政、立花宗茂等、これに属す。よそ軍兵六万余騎なり。かの晋州の城は大なる江は前にありて底ふかく、三方は岩石そばたちて壁のごとく、上に塀をぬり、矢ざまきりならべ、牧司は朝鮮の軍兵二万人を率して固く守る。時に劉挺も兵を率し来りて大丘府に陣をとる。日本の諸大將みな思はく、此城たやすく攻めとしがたし。されども先日恥をすゝかんため、心ざしをはけましてあらそひすゝむ。毛」(3ウ)利秀元は西の手に、浮田秀家は東の手に、加藤、小西、黒田、浅野は城の大手むかひ、或は楯、或は櫓、或は竹束、或は熊手、さまざまの道具をとゝのへをしよせ／＼込のぼらんとすれども、鉄を湯にわかして蒔ちらし、手松明に火をつけて焼たつる故に、道具に火もえつきてみな焼崩されけり。清正は、小西行長が和ぼく諸事をとりもちて、朝鮮の兩王子を返しをくり、わが大功いたつらになる事をいかり、晋州を攻つぶし和ぼくのあつかひを破らんとす。此故に、諸軍にさきだちて



挿絵第一図

すゝみ、手の郎従をもつて城の高櫓の隅石を引ぬかせしを、櫓かたふきくつれたり。城中さはぎ立てふせきける」(4オ)を、加藤清正軍をすゝめてこみ入たり。秀元は西の手より急にせめ入れれば、城中あはてさはぎて我さきにと落ゆきて、打ころさるゝもの一万五千三百人、その外、或は岩かどにたをれ死し、或は河水におほれ死す。城中すべて死する者二万五千余人なり。城主牧司は軍兵を左右に立て突て出たるが、打乱されて林の中にかくれ居たりしを、秀家が郎従岡本権丞といふもの、さかし出して首をとる。婦来りて生捕のものにみせしかば、疑所なき牧司が首なりといふ。これによりて、その首を塩にひたし名護屋につかはす。」(4ウ)

〔挿絵第一図(5オ)〕

秀吉公、大によるこび給へり。此たび城にのりけるは、加藤、小西、黒田、その軍功おなじといへとも、清正すでに大手の高櫓を引くづしける故に、城中乱れ立て落ければ、加藤清正を第一とす。政宗小勢をもつて渡海し、軍忠をつくす。秀吉公これを賞じて感状を給ふ。秀元大軍をもつて西の手より込のぼり、首をとりし数、諸大将よりおほし。晋州の城には朝鮮数代の宝物おほく納めをく。城すて落て火かゝりければ、箕子を封せし古しへより世々相伝の重宝共おほく焼うしなはる。諸大将衆、会合して晋州先陣の事を語る。黒田甲斐守長政すゝみ出ていはく、此たびは」(5ウ)我先登たり。誰人かあらそはんと。清正、その臣飯田角兵衛をよびて問。飯田こたへていはく、我まづ城に入て首一とりて出し時、黒田長政とはしめて逢たり。いかでか長政を先陣也といふべきと。黒田長政またいはく、軍將たるものゝ先陣は我ならで誰ぞやと。清正笑ていはく、まことに然なり。時の人みな晋州の城落されしをもつて奇特の軍勇を感す。朝鮮王李哈は、王城にかへりていまだ二ヶ月をも過ぎるに、晋州の城おちければ、李哈大におどろき、大明の諸大将に急を告て加勢をこふ事、櫓の子を引かごとし。呉惟忠は善山府に陣とり、劉綎は大丘府に陣どり」(6オ) 駱尚志は南原を守り、李如松は開城にありて、李哈が加勢をなす。李如松、すなはち沈惟敬をよびて、いか成和ぼくのあつかひにてか有ける。日本と内通して大明をほろぼさん

とする事かと責ければ、沈惟敬、すなはち釜山浦にいたり、小西行長に逢て和ぼくの約を違たる事をとがむ。行長大にいかりていはく、汝和ぼくのあつかひを調たりといふとも、大明の軍兵しきりに朝鮮に来る。これ汝我をあざむく也と。沈惟敬それより大明に入てしばし和ぼくのはかりことをめぐらす。

秀吉公、名護屋にをひて瓜島をひろく作らせ、旅飯屋、茶屋、店屋をその道に餽相にたてさせ、秀吉公、諸將とお（6ウ）なしくたはふれあそばんとす。みづから柿帷子に藁のこし蓑、菅笠を着し、瓜の籠を荷ひて、味好の瓜めせくとありしは、商人に違ふ所なし。大権現は葦壳となりて、葦かはしとのとたまふも、よく似給ひし。

丹波中納言秀勝は漬物瓜を荷て、かりもりの瓜めせくとふつゝかに売ける有さま、不調法なるも興あり。織田常真は褌衫僧となり、浅ましげなる同宿に破たる文笈をもたせ、修行の体に物し給へ共、狼に衣を着せたるやうに、いとあらしくし。

加賀大納言利家は高野聖となり、笈を肩にかけ、（7オ）

- 〔挿絵第二図（7ウ）〕
- 〔挿絵第三図（8オ）〕
- 〔挿絵第四図（8ウ）〕
- 〔挿絵第五図（9オ）〕
- 〔挿絵第六図（9ウ）〕



挿絵第三図



挿絵第二図



挿絵第五図



挿絵第四図



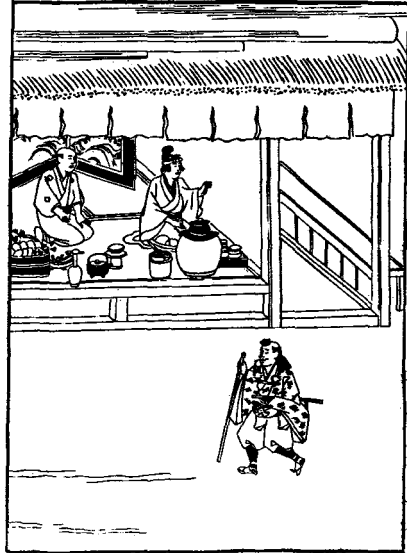
挿絵第七図



挿絵第六図



挿絵第九図



挿絵第八図

〔挿絵第七図（10オ）〕

〔挿絵第八図（10ウ）〕

〔挿絵第九図（11オ）〕

宿かふくと声ながく引て、仮佐たる有さま、左もありげ也。会津

忠三郎氏郷は荷なひ茶うりに成て、秀吉公に極上の茶をまいらせて、

佃をつよくこひけるは一興あり。三松老は尾州斯波の家系津いんじん

り、あかき半帷を着し、白き帽子にてかしらつゝみ、弦桶を肩に

かけ、弦めさうくといひて、鼻さきうこめきありきしも又をかし。

織田有楽は会下僧となり、行脚の客僧に瓜御結縁あれと請給ふ。秀

吉公、御手づから二ほどし廻向してきこしめせと仰せしを、いや

熟なり、よく熟たるを給と乞給ふも一興あり。有馬中務卿法印は、

有馬の池坊になりて、有馬の温泉（11ウ）の縁起をことごとくしく

いひたて、諸病いやす徳をのへられしは、所からの作意あり。前田

民部卿玄以法印は、熊野比丘尼となる。そのさま、勢高く肥太りて、

しかもにくていらしきかほつきなるが、をかしげなる声して念仏を

申せば、仏になる、それもむつかしくは昼寝をして心をすまし、正

直にして現世を本とし、主に忠あり、親に孝あらば、生仏なりとす

められけるも興あり。その外、欄宜、薦僧、鉢敵、猿まはし等、

種々の出立なりけるも、とりくと興をもよをす。その中にも、旅

籠屋の亭主には蒔田権佐なりけり。秀吉公の中居に藤壺といふ女房、

白き生絹を着し、黒緞子の前垂、真紅の袴（12オ）かけて、旅籠

屋のかゝとなりける、いと甲斐くし。茶屋の亭主は三上与三郎也。かゝには秀吉公の御こしもとにつかうまつる常夏といふ女房をなし給ふ。広袖のゆかたに南蛮頭巾をかうふり、常夏は座して好茶あがり給へ。あたゝかなる饅頭もおはしますといふ。藤壺は、御食まいれ。甘齋、切麴も候ぞ。こなたへ立よりやすみて通らせ給へとて、秀吉公の御手をととりて引入奉れば、秀吉大に興じ給ひて、目もなく打わらひ給ふ。諸將もみなよろこびける。かやうの事も永く在陣の人々を慰給ふ所也。

八月、秀吉公、書を浮田秀家、毛利秀元につかはしたまふ。(12ウ) そのおもむきは、兵糧、塩噌等は増田右衛門、早川主馬首はからひとして倉にこめ、炭薪を伐つみ、寒天には軍兵に焼火せさせ、舟に居るものをば小屋をつくりて入られ、大雪ふらば城中に引こもりて春を待べしと也。

九月にいたれども、大明和ぼくの返事なし。秀吉、又書をつかはし給ふ。そのおもむきは、諸軍の砦、陣よくかためよ。大明和ぼくの事、偽ならんか。諸將心をゆるすべからず。加勢をつかはして朝鮮を打ほさんと也。

沈惟敬、大明に帰り、司馬石星に相談し、李如松、劉綎等、軍を引入べきよしを大明帝に奏聞す。明帝命ありて、李如松は開城をとりはらひて明に帰る。劉(13ウ) 綎は猶とまされり。日本の兵、釜山浦に充満す。李如松が明に帰る時に、朝鮮人みなおこる。沈惟

敬、すでにさまぐの物を小西行長にをくる。又、日本の旗五本をうけて蔵して披露せず。李如松聞つけて沈惟敬をころさんとす。しかれども石星のためになだめをきぬ。

大明和ぼくの返書なき故に、これ偽なりとして、秀吉公、大権現及び前田利家と昼夜軍謀の評定あり。一日、黒田如水出ていはく、去年大軍を朝鮮につかはす時に、大権現か利家かをつかはされば、軍法よく滞ことなかるべし。清正、行長等は、唯武勇のみを好とし、年わかくして軍の道儼練あらず。清正と行長と(13ウ) 中よからず、たがひに軍法を破りて用ひず。朝鮮の土民、みな山林に逃かくれ、日本人の居する所は青草一本だになく、人民さらにすまざる故に、日本在陣の諸大將、大にくるしめり。その間に軍兵退屈せば、内より乱れなんと申す。秀吉、けにもとおぼして、大権現、利家、氏郷、浅野長政にかり給はく、釜山浦在陣の諸軍、故郷を思ひて兵をすゝむる気なし。我みづから彼におもむかん。日本の事は徳川殿にあづけ奉り、利家を左將軍とし、氏郷を右將軍とし、我卅余万人を率して旗をなびかし、劍をふりて三韓を打平らげ、直に大明をせめふせ、我大明皇帝とならんとす。(14ウ)

大権現のたまはく、我壮年より武道をたしなみて、この年にいたるまで、つるに敗北の恥なし。今、日本に居て守り居らんは武威なきものとおぼしけるや。たとひ命せありとも用ひじ。渡海して命をすてんと也。浅野長政すゝみていはく、秀吉公にはよく狐の付きたり。

日比の秀吉にはあらず。徳川殿いかり給ふ事なかれと。秀吉公聞て髪さかしまにたち、鬚両方に分れ、大にいかりて刀を叩ね。汝だんな彈正非礼のこと葉は何事ぞやと。利家、氏郷、をさへて申す。彈正をば我ら誅すべし。君の刃をけがし給はんやと。淺野すこしもおそれずしてはいく、我が輩わがら數百人をころし給ふとも、うれふべか(14ウ)らず。抑このごろ兵を朝鮮につかはし給ふ。日本の軍兵、大半渡海す。往來の伝送、その費すくならず。諸軍、諸氏等、飢に望む事、苦しみはなはだし。君、今日船を出し給はゞ、明日は群盜ぐんたう一揆いのごとくおこりあつまり、乱をなさん事疑なし。徳川殿、日本にとどまりてさま々さまざま策ありとも、何ぞ一旦の力をもつて、四海の乱を平げんや。君ねがはくは、師を返して文をおさめ、武をひそむるの政をおこなひ給はゞ、国家太平貴賤のよろこび何事かこれにまさらん。もしかくのごとくならずは、我頭をはねらるべしと申す。秀吉いよ々いよ怒給ふ。利家、氏郷、すなはち彈正、院いんで退しむ。彈正は家に帰りて打手を相待、腹き(15オ)らんと思ひさだめてあり。數日を経て肥後国の使者来りてはいく、薩摩人、梅北某といふもの、党をたて類をあつめて熊本くまもとの城をせめらる。国中おほく梅北に属すと。秀吉大におとろきて、徳川殿、はやく彈正をつれて来り給へと。彈正まいりぬ。秀吉公のたまはく、汝が死をなだむべし。汝が子左京大夫幸長をもつて梅北をうたせよと。彈正大によるこぶ。秀吉公は、大権現にむかひてのたまはく、幸長初めて軍將となる。

年猶わ少し。本多中務太輔忠勝をそへしめんと。忠勝をめす。かくてのたまはく、幸長年少、軍道うる／＼しからん。軍事大小となく忠勝にまかする也と。幸長、忠勝、共に命の辱おとしことを拝し、肥後におもむか(15ウ)んとする所に、肥後の目代来りてはいく、熊本城主の家老、閑の梅北をあざむき誅す。殘党等ちり／＼になりて国平か也と。幸長、忠勝は国境より帰る。秀吉公、淺野彈正をつかはして肥後の仕置をなさしむ。

清正、もとより大明和ぼくの義を破らんとす。内藤飛騨守如安、大明におもむきて帰らず。明人、如安を殺すかと思へり。是によつて、十一月三日、加藤清正、軍兵を率して安康の城をせむる。此時、劉綎は慶州けいしゅうにありしが、来りてすくふ。清正これを打破りて首をとる事、三百余級、劉綎逃にげて慶州に帰る。

秀吉公の嬖妾べいせつ淺井備前守、男子を生ず。その名を拾ひろと名(16オ)づく。後に秀頼と号す。此若君生れ給ひて平安なり。秀次、書を名護屋につかはして申さる。秀吉聞て大によるこびてのたまはく、朝鮮の事は、沈惟敬すでに和ぼくのあつかひをいたす。軍旅の事は、徳川殿、利家、これをさばき給へとて、速舟にめして大坂にかへり、よろこび給ふ事限なし。秀吉公、後には秀次をすて、此若君を世にたてんと思ひ給へり。

内藤飛騨守如安、すでに經略孫しん敏が、宋そうの昌を經略とする事年久し。また願ねん養謙に代たはからひとして、大明に入たり。司馬石星、あつくもてなして問答の

事あり。和ぼくの事成て、沈惟敬、釜山浦にいたる。日本の諸大將、大半は「(16ウ) 帰朝せり。行長等は猶とまらる。

同三年、秀吉公、天下を秀頼にゆつらんとす。関白秀次、更に辞退するの色なし。秀吉公、若君秀頼を大坂に居しめ、隠居の家を大和の多門にたてんとす。されどもその地かたくじけて、京都大坂の往来宜しからずとて、山城国、木幡伏見に城をつくらしめ、奉行六人をえらひきためらる。佐久間河内守政実、瀧川豊前守、佐渡駿河守、水野龜助、石尾与兵衛、竹中貞右衛門なり。諸国の役歩をあつむ。をよそ廿五万人の費也。石を醍醐山科雲母坂よりはこぼせ、材木を岐岨土佐山より伐とりて、城すでに成「(17オ) たり。また、河辺に小山を築、材木をうへ、その中に堂を立て学問所と号す。又、沈香木をもつて数寄屋を立らる。秀吉公、茶湯者をまねき、茶を給ふてみづから慰む。朝鮮在陣の諸大將、軍旅の久しきにくるしみて、死せし人／＼は、丹波少将秀勝、東郷侍従、長谷川藤五郎秀一、加藤遠江守也。中川右衛門大夫秀政は、軍兵を率して合戦す。朝鮮人いたぶるかされ、あざむかれて打死す。その外打死病死の者、数をしらす。秀吉公、大にあはれみ、書をつかはして、釜山浦諸城の軍士はまづとどまり、その外は帰朝すべしと也。此故に名護屋、釜山浦在陣の諸士、よろこびの眉をひらきて、みな伏見の城「(17ウ) にあつまり来る。

二月、秀吉公、大坂を出て吉野山の花を見んとせらる。めしつれら

る／＼／＼までも、花をかざり金を鑲はむ。紀伊六田橋を渡り、市坂にいたりてみれば、あらたに作れる家あり。これ大和中納言秀俊の作りまうけて相待るゝ茶屋なりと申す。秀吉公、立より給ひければ、秀俊大にもてなざる。それより花園、桜田、奴太山、隠家松、千本桜の辺にあそび、関屋の花の下にいたりて詠哥の興あり。秀吉公、すでに金花表、二王門を過て蔵王道にまうで、桜嶽のぼり、後醍醐天皇の皇居の旧跡を見給ひ、今熊野、達天山、聖天山、弁才天「(18オ) 山などをめぐりて心をなぐさみ、吉水を旅の宿とし、二日逗留あり。御とも数万人、そのめぐりにやどる。直夜の下ゝにも酒肴給てよろこばしめらる。かくて秀吉公、歌の会をもよをし、みづから和歌五首を詠し給ふ。関白秀次、右大臣菊亭晴季、権大納言中山親綱以下、紹巴、由己、昌叱にいたるまで、みな詠歌あり。秀吉公、はなはだ心をよろこばしめ給ふ。

三月三日、秀吉公、高山にのぼり、青岩寺を旅館とし、父母のため焼香礼拝し、一山僧徒八千人をめし、米を給て、太政所の冥福を修せらる。金堂の大破してかたぶきたるを見て、米一萬石を施入す。木食上「(18ウ) 人興山、これを掌どる。秀吉公、猿楽をもよをし衆徒を慰めんとて、金春大夫等をめし、青岩寺に舞台をかまへて猿楽の能あり。一山の衆徒萃みる。秀吉公、かくて高野を立て兵庫にいたり、大坂にかへり給ふ。

秀吉公、大坂の本丸にして、金春八郎をめして、由己が新につくれ

る吉野の花見、高野詣、明智、柴田、北条征伐といふ五番の謡を能にせさしめ、秀吉公も習ひて舞つゝ北政所に見せしむ。

此年、司馬石星、内藤如安がこたふる詞を大明帝に奏す。明の帝、同四年正月に日本国王の印を鑄させ、「(19才)冠、束帯の具、おほく調のへらる。その費、数万の黄金にあたる。監准侯李言恭が子李宗城を正使とし、都指揮楊方亨を副使として、勅書印章を日本につかはす。勅書の中に、秀吉公を封じて日本国王とすといへる文あり。正使、副使、沈惟敬、ともに大明を出て三浪江に逗留し、釜山浦の軍將帰朝するを待居たり。

このころ、秀次関白職にあり。天下の上下尊仰せずといふ事なし。秀次大にをこり、悪虐を好み、しは／＼城にのぼりて鉄炮をはなち、道ゆき人を打殺してたはふれとし、又諸寺諸山の僧に命せて、誦百番に注をつくらせて世におこなはる。黒田如水、すでに秀次を諫「(19ウ)ていはく、秀吉公、年来天下に御心をつくし、風に櫛けづり、雨に沐で、今猶名護屋におはして、思ひを朝鮮征伐の事に思ひをこがし、齡五十にあまり、身疲、心勞給ふ。抑公は、これ匹夫の人也。たま／＼秀吉公の幸に逢て父子の契約をなし、教国を領じて関白にのほる。その榮貴まことに一生に極め給ふ。秀吉公、百歳の後に、その遺跡をつがんものは公にあらずして誰ぞや。まさに今、秀吉公の苦勞を見ながら知ぬ体にて、これに代てつとめんと思ひ給ふ心なし。恩を知ざる不孝の人といふべし。公ねがはくは名護屋にい

たり、秀吉公に代て諸大将をさし引し給はく、天下額をかたふけて大に悦はん。京(20才)都にありて腹ふくらかし、足なげ出し、たはふれを締と給はんは、これ天道の嫉ところ、大におそれ給ふべしと。秀次つるに諫にしたがはず。これより後は、世の人みな秀次をそしりわらふ。秀頼生るゝに及びて、秀次の威勢をとり、天下いよ／＼軽む。秀次、武器をとゝのへ、仮初の田にも兵具をもたせ、従者みな膚に着込をまとひ、小袖の下に腹巻して、心ある体也。人みなあやしむ。秀次謀反の企ありと私語ことあり。伏見に往還し、山野に遊樂するにも、鎌の垢鏽をみがき、火繩を薫べて、前に敵あるがごとく、用心尤きびしかりければ、事すでにあらはれ、人民もつはら風聞す。」(20ウ)つゝに秀吉公に聞ゆ。

七月、秀吉公、すでに宮部善祥坊法印、徳善院玄以、増田右衛門尉、石田治部少輔、富田左近將監を聚衆につかはし、秀次にいはせられけるは、仄に聞、野心の企ありと。定て実なるべからず。その実否を糺くせんとす。若其事偽ならば、七枚の起請を奉れと也。

秀次、驚ていはく、此事大なる偽也。我君恩をかうふる事、山のごとし。何によりてか逆心あらんや。只ねがはくは君の智鏡をもつて我が丹心をてらし給へとて、七枚の誓詞を書て五人に渡さる。五人の使、かへりてこれをまうす。秀吉公のたまはく、それ何ぞ我にそむくべきやと也。」(21才)

木村常陸介、秀吉公の命に依て、淀にありて普請のいとなみいたし

けるが、一夜、女房の輿にのり聚案に來り、奥まで昇入て、夜の明がたまで秀次と額を合せて密談して、その夜淀に歸る。常陸介が父隼人佐は、秀吉公の寵臣也。此故に常陸介、天下の執權を心にかけしを、石田治部少輔三成にうばゝれて口惜く思ひ、秀次に仕へて時を待けり。石田、増田、彼を悪て讒をかまへてころさんとす。かゝる所に、石田三成は、木村が夜中に密談せし事を聞きつけて、何はしらず、かやうの体なりけりと秀吉公に申入たりければ、秀吉公、
 「領て聞給へり。」(21ウ)

毛利輝元、使者を馳ていはく、去年、関白秀次の使に白江備後守來ていはく、輝元誓紙をかきて太閤の死後までも秀次にそむくまじと申せとあり。此故に逃がたく誓紙を血判してまいらせたりとて、其案紙を石田三成に渡して秀吉公へ達しけり。其外、方々より秀次の逆心を告る事おほし。秀吉只公、しはく疑給ふ。

秀吉公、かさねて宮部善祥坊、徳善院玄以、中村式部少輔一氏、山内対馬守一豊、堀尾帯刀吉晴を聚案につかはし、秀次に告ていはく、世間の浮説まち／＼なり。直面に聞とゞけて疑を散すべし。此方へ來りたまへとなり。」(22オ) 秀次、更に思ひ分給はず。吉田修理亮、さゝやき申けるは、逆心のおぼしめし立、実ならば伏見におもむき給ふべからず。実ならずとも聚案におはして理り給へ。それにもゆるされずは、我に一万騎を付られよ。伏見をせめ落し忠をつくさん。輕しく伏見にいたり給ふ事勿体なしと申せしかども、秀

次、心後けるにや、つゝに五人の使者にかこまれ、伏見にいたり給ふ。城中へは入られず、木下大膳亮が家に入奉る。秀吉公、御使あり。速に高野山にのぼらるべしと也。是に依て秀次、俄に髪を剃らおろし、高野におもむく。近習の臣百余人、みな髪を切て相したがふ。騎馬、すで(22ウ)に二三百許あり。木下大膳亮、秀吉公の命をうけて、騎馬廿人、歩の者十人の外、禁ぜらる。これに依て武藤左京亮、生田右京亮、雀部淡路守、津田雅樂助、其外、東福寺南昌院虎岩西堂等、相したがつ。諸大名、使をもつて見舞あり。秀次かたく禁制せらる。高野山青岩寺に入給ふ。

秀吉公、すなはち徳善院、増田、石田、浅野、長束五奉行の連署、木食興山上人につかはさしめ、秀次切腹の事を告しむ。福島左衛門大夫、福原右馬助、池田伊与守に仰せて高野山におもむかせらる。

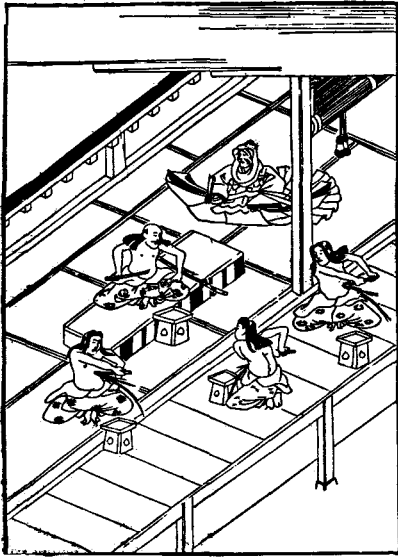
木食興山、これをみていはく、秀次公の事、叛逆の企尤憎へし。我秀吉公の(23オ)命をそむくべからずと也。福島、福原、池田、軍兵三千人をもつて青岩寺をとりかこみ、切腹あれと申す。秀次いかりて淡路守をもつて興山につげていはく、三使すでに寺をかこむ。上人これを制せよ。秀次心よく切腹あるべしとなり。興山此よし申されしかば、軍兵を退けたり。

秀次、沐浴し給ひ、自殺をもよをさる。山本主水、十八歳にしてまつ死す。次に山田三十郎十八歳、次に不破万作十八歳、次に虎岩西堂死す。次に秀次切腹あり。年廿八。雀部淡路守以下皆死す。福島、

福原、池田、伏見に帰りてこれを白す。」(23ウ)

〔挿絵第十圖 (24オ)〕

初め、正親町院崩御ありてまだ七日も過ぎるに、関白秀次、しばし鷹野鹿狩をしたのしみとす。一日、女房達をつれて比叡山にのぼり、昼夜に堂塔をけがし、又山中の鹿猿狐兎諸鳥を狩ころす事、数しらず。大衆うれへて木村常陸介をもつて、此山は桓武天皇草創よりこのかた、女人は迹を絶て影をもいれず。肉食殺生更に例なしと。秀次いかり罵ていはく、我今天下の主也。こゝにあそぶ事、平人には似るべからずとて、南光房にして、鹿猿魚鳥を料理せさせらる。負僧のわづかに蓄たる塩噌の中へ、魚鳥の腸胃を投入さす。



挿絵第十圖

一山の大家、弾指をして、大にこれをにくむ。」(24ウ) 鳥けだものをころす事、狩漁を好み給へは、世の人、殺生関白といふ。秀次ある時北野にあそび、盲目の杖を撃てゆくをめして、酒をのませ、秀次剣を抜て右の手を打おとす。盲目大によはより、人殺といふ。熊谷大膳亮はいはく、汝それにも命は惜きかと。盲目、その秀次也と知てこたへていはく、我両眼をうしなひてだに大なる憂とす。今又右の手をうしなふ。命生て詮なし。只とく首を切て殺生関白の名を後代につたへよといふ。秀次大にいかつてすゝに切給ふ。これらの悪虐数しらず。つゝに身の上にむくひけり。

木村常陸介、白江備後守、熊谷大膳亮、栗野木工助、(25オ) 日比野下野守、山口少雲、丸毛不心は、秀次の党類也。すゝめて悪虐を手伝せし者なれば、皆誅せらる。その外、近習外様衆、おほく大名にあづけて殺さる。延寿院玄朔、法眼紹巴を遠流せられ、其後めし返さる。

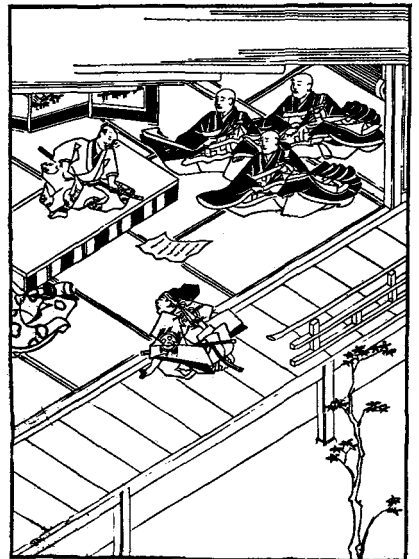
秀次の妻室、子息二人、山口少雲が娘女子をうむ。北、寵愛の女房達三十余人を徳永法印寿昌が家にうつし、其後、又丹波の龜山の城にをくり置、八月に三条川原にめし出し、徳善院、増田、石田、検使としてみな首を斬たり。をのゝ哥よみて死す。見る人涙を流す。その首を河原に埋みて畜生塚と号す。

秀吉公、六ヶ条の法令を諸士に下し給ふ。大権現、前(25ウ) 田利家、浮田秀家、毛利輝元、小早川隆景、加判あり。一には、国

主郡長嫁娶を私になすべからず。公方の命を得て定むべし。一には、大名小名私に一味の契約すべからず。三には、喧嘩口論は堪忍のかたを理とす。四には、妾おほくもつべからず。五には、酒は酔をかぎり、乱酒すべからず。六には、輿をゆるす人、大権現、利家、影勝、輝元、隆景、公家の老臣、五山の長老なり。其外は国主たりとも年わかきは許さず。五十に及ぶ輩は一里の道ならば籠駕をゆるす。病ある人は此制の外也。これを背は死罪におこなはんと也。又、九ヶ条を諸人に出さる。その中に、諸公家門跡は、有職学文、諸寺諸社はその先例を守り、年貢は三分(26才)二を地頭に、一分は百姓にあたへよ。訴訟は十人衆、五奉行評義し、衣裳の紋は菊桐を用ゆべからず。覆面して道を往来すべからずと也。大明の使者李宗城、楊方亭、なを三浪江に逗留す。李宗城は貴族の子也。始て正使の勅命をうけて、その出立花やか也。大明朝鮮の諸人みなあつまりみる。沈惟敬うらやみきどをりけるは、和ぼくのあつかひはわれこそあらめ、今我を副使の勅命にだに預す。只道しるべの役とせらるゝは何ぞと、うらみ居たり。司馬石星、使を立てはやく日本に渡れといはずれども、兎角言をかざりて渡海たやすからずといひてはたさず。今年も暮たり。」(26ウ)

〔挿絵第十一図 (27才)〕

此ころ、朝鮮在陣の人、一の大虎をうちころして秀吉公に奉る。これを京中をもたせわたして諸人に見せしむ。長一丈あまり、斑なる



挿絵第十一図

事、毛色あざやかにしてめづらか也。

文禄の頃かよ、石川五右衛門といふものあり。同類をあつめ、諸人をかどはかし、強盗をいたす。つゐに河内の立田越にしてからめとる。その母并に妻子同類二十人ばかり、三条川原にして、釜に油さして煎殺さしむ。その釜は、今七条辺の川岸に流れ傍て水中にあり。世に釜か淵と名つく。

これより三十年ばかり以前に、南蛮の耶蘇といふもの(27ウ)商人となり、日本に來りて邪法をひろむ。

文禄年中に、秀吉公、その人民をまとはす事をいかり、すなはち伴天連六人、同類二十余人をとらへ、京都大坂を渡して肥前国長崎に

をくりて、みな隣にせられ、商船を停止せんとし給ふに、長崎の民を訴へてゆるさる。

慶長元年、宗城大に故郷を恋て泣けり。沈惟敬、畏ていはく、和ぼくの事破れたり。日本におもむかば二たび帰らじと。李宗城大におそれ、勅書を打すて、形ちをやつし、ひそかに釜山浦を夜逃にして潜居たり。次日、方亨、大明に申をくる。楊方亨、我一人にて此使かなふまじとて、大に泣つゝ沈惟敬をおそれて書を石星に「(28)おつかはし、李宗城をそしり沈惟敬をばほめたり。大明帝、すなはち楊方亨を正使とせられ、沈惟敬をば神機三營添註遊撃になして、副使の事をおこなはしむ。六月に、正使楊方亨、副使遊撃沈惟敬、從者四百余人を率して釜山浦を立て日本に来る。此時、加藤清正、小西行長もつれて帰朝す。朝鮮国王李哈も、沈惟敬に責められて全羅道觀察使黃慎、將官朴弘長を使者として同しく渡海して来る。閏七月、大地震あり。土裂水涌、京都伏見の家々民屋倒れくづれ、人死する事、数しらず。大仏殿崩れて仏像破れたり。秀吉公行てこれを見て、仏を叱て「(28ウ) いはく、仏像を安置する事は国家太平のため也。しかるを今、その身をたに保得ずして裂けたり。何の益かあらんとて、みづから弓を引てこれを射らる。信濃国善光寺の如来をめしのぼせて大仏殿にをかる。其後又善光寺へをくり返し、新に大仏を鑄たてゝおさめらる。

八月に、楊方亨、沈惟敬、及び黃慎、朴弘長、ともに泉の堺につく。

秀吉公の命に依て、五六日休息して後、廿九日に伏見に来る。京都近国の人民あつまり見る。使者、道々管弦を奏せしめて伏見にいたる。此時秀吉公、柳川豊前守調信をもつて朝鮮の使者黃慎、朴弘長を責らる。朝鮮の王子、みづから来り謝せずして、「(29ウ)使をつかはす。無礼のいたり也。対面すべからずとていかり給ふ。九月

二日、楊方亨、沈惟敬登城して、正使楊方亨は前に、副使沈惟敬は大明帝の金印をさゝげて階の下に立たり。少頃ありて殿上の幕をひらき、秀吉公、近習二人に太刀腰刀もたせてゆるぎ出給へば、並居たる大名、かうべを地につく。沈惟敬ふかくおそれて、金印もちて匍匐出たり。楊方亨、おなしく匍匐てふるひわなとき、足すくみ口つぐみて色をうしなふ。小西行長すゝみて、大明の使者その礼をおこなふべしといふに、沈惟敬、すなはち金印勅書封王の冠装束をさゝげ、日本諸大名へも冠服五十余具をいだしけり。対面の後、まづ宿に帰る。秀吉公、さま「(29ウ) くもてなし給ふ。次の日、上壇の中央厚畳は秀吉公の座也。威儀をかゝやかさんために、秀吉公は赤き装束に唐冠して、あたりをはらひて座し給ふ。中壇の右に大明の両使を座せしめ、左は得川殿、前田以下七人、座してみな大明よりをくれる冠装束を着し、其外の諸大名は南の縁に座し、諸大夫以下は廊下庭上にみち／＼たり。膳部は大明の法にしたがひ、膳の高さ三尺に五尺四方也。牛羊豚鶏等、金銀をちりはめ、軌則の花をたて、少年の大名花やかに出たち、配膳あり。杯を両使に給は

る。かくて猿楽の能あり。

秀吉公、花島の山庄にして、承兌、靈三、永哲の三僧(30オ)を
めして、大明の聖書を読みむ。秀吉聞て大に目をいからかし、大音
にのたまはく、大明我を封じて日本国王とすといへり。これ何ぞ。
憎きこととはなはだし。我武略をもつて日本の主となる。何ぞ大明の
力をからんや。行長がいはいはく、大明封じて我を大明国王とすといへ
り。我信にして軍をかへしたり。行長志を大明に通じて我をあざ
むく也。行長が首を斬て腹を居なんとて、大明よりをくりし冠装
束をかなぐりすて、勅書をなげほをりて行長をめす。その声、雷の
ことし。行長まいりて、これわが所為にあらず。三奉行のむねをう
けてさだめたりとて、数通の文を取出して証拠とす。秀吉(30ウ)
公、怒をさへて少止め。行長は虎の牙をのがれ、鯨の涎をまぬか
れ出て退きたり。秀吉公、加藤清正、石田、増田、大谷をめししての
たまはく、大明我を封す。心になはねども、まづ姑堪忍する也。
朝鮮はゆるすべからず。明の使は明朝泉界に追下せ。二たひ大軍を
もつて朝鮮を攻干べし。朝鮮の使者は首をはねよとありしを、承兌、
靈三、永哲、諫ととむ。次の日、両使は泉の境に帰る。秀吉公、
やがて清正及び西国九州の諸大將をあつめ、朝鮮征伐の軍陣をさだ
めらる。

楊方亨、沈惟敬、相議していはく、我ら万里を越て使節となり、返
書をとらで帰朝せば何の面目あら(31オ)ん。只ありのまゝにか

たらずは、大明朝鮮ほろびなん歟とて、泉の境より舟を出して面
なく帰朝す。

秀吉公命に、加藤清正、小西行長は前陣をいたし、中国九州の諸國
軍兵等、こと／＼く渡海して、新羅、高麗、百濟の三韓を攻平げよ。
去ぬる七月の地震に崩れし伏見の城は、東国北國畿内の大名小名あ
らため築べしと也。

秀吉公、大明の使者のいたつらに帰ることをあはれみ、柳川豊前守
調信をもつて金銀等を使者に給ふ。豊前守、ひそかに朝鮮の使者
黄慎にかたりていはく、来年朝鮮征伐の事、すでに定まりぬ。汝
帰國せば、かなら(31ウ)す太子を日本に來らせ謝し申すべしと
也。黄慎大におそれて大明の使者にかたる。かくて肥前國にいたり
て順風を待て日を重ねし所に、加藤清正は肥後にくんだり、黒田長政
は豊前に帰り、をの／＼軍兵をもよをして朝鮮渡海の用意をいたす。
楊方亨等、色をうしなふて大におどろく。沈惟敬思はく、我だに死
ずは、和ほくのあつかひは又ととのふべき也とて、更におどろくい
るなし。此時、寺沢志摩守正成、すでに秀吉の書をもち來りて大明
の使者に示す。これ定めて使者をよるこび給ふ書ならんとおもひ、
いそぎひらきてみれば、それにはあらで朝鮮を責るに三の罪科をし
(32オ)るしたる文なり。そのおもむきにいはいはく、前年朝鮮の使者
來りて委くその情を言上せしかども、大明の事をば隠して申さざり
し。其罪一つ。沈惟敬あながちに欺き請故に、朝鮮二人の王子后妃

以下をゆるしてかへしをくりき。然れども速かに来りて恩を謝せず。大明の使の来るを待てやう／＼臣下をつかはせし。王子は来らずして黄慎、朴弘長のいやしき使を渡海せしむる。其罪二つ。大明日本の和ぼく并に使をつかはせし事、みな朝鮮の王の心として手のうら覆すがごとく表裏をつくる。故に使をそく来れる。其罪三つなりと。朝鮮国王李貽、此書を見て大に驚き、少も「(32ウ) 隠さず別に一通をうつし、ありのまゝに大明にいひつかはして、加勢を給はらん事を申す。

大明の使楊方亨、沈惟敬、まづ朝鮮に帰る。此時朝鮮京畿道都体察使李元翼といふもの、秀吉公重ねて大軍をもつて渡海せしむべしと聞て、軍勢を駆あつめてこれをふせかかん術をめぐらす。楊方亨、沈惟敬に逢て間に、委しくかたりけり。李元翼がいはいはく、速に釜山浦の城を守り、日本の軍勢よせ来らば足をもためさせず、急にこれを追打べしと、いと絆もなくいひければ、沈惟敬がいはいはく、命のごとくに追うたれなばめでたかるへし。然れども「(33オ) 日本人は武勇すぐれて命を塵芥ともせず。毎りて初度の軍に利をうしなはば、ゆゝしき後の大事成べし。ふかく知慮をめぐらされよといふに、李元翼、心まよひ畏神つきて、軍兵をだし出すことを得ず。かくて楊方亨、沈惟敬は大明に入たり。沈惟敬、和ぼくのあつかひ仕損じて、人の笑種にならん事を思ひて、伴ていはく、秀吉すでに明帝の天恩かたしけなき事を拜し、冠をいたゞきて懇に謝せられたりといふ。

又、小西行長に頼みて猩と緋の毡、天鵝絨及び大小の金器等、卅余种をととのへ、その箱の上に大文字に、日本国王豊臣秀吉所餽遺之什物也と書付て、「(33ウ) 返礼なりとて、明帝にさゞぐ。明人みな笑ていはひ、猩と緋毡、天鵝絨は、これ南蛮の土産也。日本の方物なりといわん事は、腹をかゝへて笑べしといふ。されども明帝とがめずしておさめをかる。司馬石星は、信の返礼と思へり。然りといへども、秀吉の返書なし。此故に、人皆疑がふ。沈惟敬、又釜山浦に行て、秀吉の謀書謀判を似せて文章をつくり、恩を謝するよしを書したゞめて、これを奉る。これにも年号月日をかゝらず。これに依て大明の臣下みないふ、惟敬が似物の書なりと。沈惟敬おそれ恥たり。

異国の大船一艘流れて、土佐国桂浜、浦戸の湊十八「(34オ) 里許の澳に寄来る。国主長曾我部元親聞て、小船を出し、見せにつかはす。これ南蛮の商船なり。大なる悪風に逢て、櫓折、楫碎、舟損じて船前より潮に込り、水に濁て五百余人はかなくなり、崑崙児二百五十人、商人三十人計、しんによ郎十人ばかり、わづかに生残りてこゝにたゞよへりといふ。元親あはれみで、糧米酒肴をあたへ、次の日、増田右衛門尉長盛に書をつかはして、秀吉公に申す。増田長盛、土佐におもむき、船中の物を点検しけるに、舟の長州間、横廿二間あり。通事出て目録を見せつゝ、小舟百五十艘にうつしのせて大坂にいたり、長盛、元親、同道して目録に合せて秀吉公に奉る。

鳥掘絲^{（34ウ）}、五万端、唐木綿廿六万端、金襴鈍子^{（35ウ）}五万端、白糸十六万斤、印子金千五百ヶ、麝香一箱、生麝香十頭、生猿十五頭、尾ながき猿なり。尾の、鸚鵡二羽あり。秀吉公大によるこび、あふむ一羽、麝香箱、及び金襴鈍子二万端を禁中にまいらせ、その外、撰家、清花、雲客、諸大名に頒給ふ。京、大坂、泉の境、奈良の町人等まで、ほど／＼にしたがひて給はる。黒舟の者には仙銀をおほく給はり、米八百人扶持、酒肴炭薪、毎日五百人分を下行あり。船大工に命せて船を修理せさせ、本国に帰らしむ。米五百石、豚百頭、鶏千羽を望み請所に、秀吉公、これに倍して酒樽百ヶ、肴五十箱、餼鈍の粉五百石を添て賜はる。南蛮人大に^{（35オ）}よろこび謝して帰朝す。

同二年正月、小西行長、肥後にありて渡海の用意を取りそぐ。秀吉公の命には、二月に出陣すべしと有けれども、秀吉のはなはだ怒給ふ事をうれふるか故なり。加藤清正は、小西がために先をせられじとて、諸大将に先だちて渡海す。

二月、秀吉公、命出さるゝは、前陣は、加藤清正、小西行長、關をとりて日替りにつとむべし。前陣にあらざる日は、二陣にあるへし。

三陣は黒田甲斐守長政、毛利老岐守、高橋九郎、秋月三郎、相良宮内太輔、伊藤民部太輔、四陣は鍋島加賀守、同子息信濃守勝茂、五陣は^{（35ウ）}島津薩摩侍從、六陣は長曾我部元親、池田伊与守、藤堂佐渡守高虎、中川修理大夫、加藤左馬助嘉明、菅平右衛門、七

陣は崎須賀阿波守家政、生駒讀岐守、脇坂中務少輔安治、八陣は備前中納言浮田秀家、安芸宰相毛利秀元、これを勤べし。釜山浦の城は、筑前中納言豊臣秀秋是を守り、太田小源五、城中の事を掌とるべし。安骨浦の城は、立花左近将監宗茂これを守り、加徳の城は、高橋主膳正、筑紫上野介守るべし。竹島の城は、久留目の秀包これを守り、西生浦の城は、浅野左京大夫、幸長これを守るべし。我今毛利豊後守、竹中源助、垣見和泉守、毛利民部太輔、早川主馬首、熊谷内藏允を^{（36オ）}朝鮮につかはして奉行とす。諸大将の善悪を見聞にまかせて、偏頗なく最貞なく、実をもつて注進すべし。船軍は藤堂高虎、加藤嘉明、脇坂安治、是を奉行とし、四国の軍兵を加勢とすべし。諸大将互に誓約して中違ふ事なかれ。大明、若大軍にて朝鮮の王城ちかく陣どらば、はやく注進すべし。我必らず渡海して、こと／＼く打平け、直に大明国に馬をすゝめて破らん事、たな心をめぐらすべからずと也。加藤清正、すでに舟を出して朝鮮に至り、竹島の城に入つゝ機張に陣をとりて、梁山を攻落し西生浦におもむき、城の近辺をめぐり見て、札を書いて朝^{（36ウ）}鮮の人にしめしていはく、

日本国加藤主計頭清正、受三太閤殿下之命、今再航于朝鮮。鮮一朝鮮人民必不疑二此牌文一、莫二恐怖而退三逃一。故先遣二我臣金太夫一以告焉。と書たり。

小西幸長が舟は、釜山浦の外よりすゝみ、豆毛浦に至り、釜山浦の古城を修理し、筑前中納言秀秋をもつて城主とし、又砦を諸所にかまへて久しく住すべき計をなす。これより後、諸大將みな相繼て渡海す。

朝鮮には、日本の大軍又来るを見て大に驚き、国王李昭、先年俄の敗軍に手創して、すなはち（37オ）王子后妃を率して海州に落ゆく。從臣等あわてふためきて、山里遠く隠れたり。李昭が寵臣に柳承龍といふものは、一方の大將軍にもと頼もしく思ひしに、王城に兵糧をこめ、用意をせさするにかこつけ、財宝をはこびとりて尚州に逃落たり。大將軍の官に補せられ、日ころは鬚をなで、臂をはりて威勢にほこりし権慄は、敵の旗を見ずして逃て東境に隠れたり。朝鮮大に乱れて、ふせぐべき力なく、急を大明に告来る事隙なし。其説には、日本の軍兵百万騎を十三段に備へて大明に攻来る。秀吉は名護屋にありて、みづから軍法を出して進退すと風聞して、恐わゝなきあわて（37ウ）さはぎ、資財雜具をとりかくす事、往來の道せばし。（38オ）

本朝將軍記（下之三）

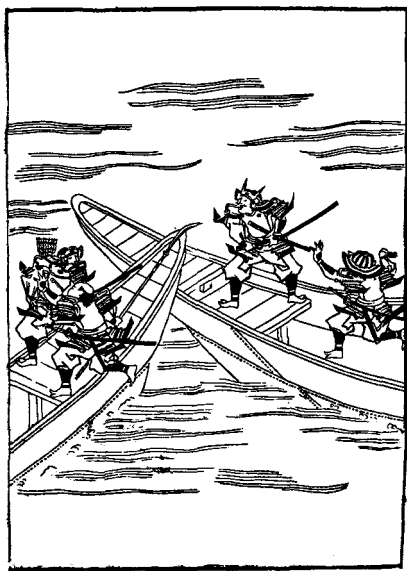
黒田長政等の諸大將十万余騎、みな朝鮮に入て、登萊、機張、西生浦、豆毛浦、安骨浦、竹島、蔚山、加徳に砦の城をかまへ、熊川、金海、昌原、威安、晋州、固城、泗川、昆陽の間に、をしかけ、村里を打やぶり追捕しければ、大明朝鮮の通路なし。然れども、朝鮮年々の兵乱をもつて米穀すくなし。諸大將はなはだくるしめり。

朝鮮の軍兵等、唐島にをひて軍舟数百艘を調のへ、日本の兵をふせがんとす。時に藤堂佐渡守高虎、脇坂中務少輔安治、これを打破らんとす。すなはち（1オ）軍評定して、使を加藤左馬助嘉明にかはしていはく、我ら唐島の軍舟を打とらんとす。足下もまづこれへ来らるべしと也。嘉明いまだ来らざるあひだに、高虎、安治、すでに軍兵を唐島につかはして相戦かふ。嘉明は是をばしらで、高虎、安治がもとに行て評定す。時に此よしを告しらすものあり。こゝにをひて、加藤嘉明大におどろきいかりて、高虎、安治に出しぬかれたりとて、いそぎ打て出つゝはせむかふ。即從追々につけてくる。高虎、安治もみな唐島にいたり、軍兵をすゝめて大に戦かひ、敵の舟おほく乗とる。安治が軍兵、打死するもの少からず。加藤嘉明はせ来りて見れば、一の（1ウ）大船に弓をつらね、弩をはり、旗をたて、戈を挙てむかふ。敵を待ける所に、嘉明飛りて只一人切

てまはり、手のしたに数十人を切たをす。敵大勢あつまり、嘉明あやうくみえし所に、嘉明が惣権七郎、及び郎従等つゞいて飛入く攻たゝかひ、つるにかの大船をのりとりぬ。数多の敵船、これにおそれ漕退る。加藤嘉明は、藤堂高虎、脇坂安治が我を欺出しぬぎける事をいかり、わか武勇をみせんとて、又ある敵船に打てむかひ、敵て海に落けるが、舳先にとりつきはねあがりて戦ひつゝ、又その舟をも取たり。敵舟ごとに矢じりをそろへて、雨の降ごとく放つ矢に、「(2オ) 嘉明が股を射させ、血の流るゝ事瀧のごとし。それを物ともせず戦かひけり。鍋島信濃守勝茂、舟をよせ来りて讃あげ、苦戦の功を感す。嘉明がいはいはく、我又敵舟をのりとりぬ。これ見給へ、鍋島殿といさみける有さま、意気凛々として撓ず。かくて書を京都につかはし、軍功を注進すべしとす。時に藤堂高虎がいはいはく、今日の先陣の功は我にありと。加藤嘉明すゝみ出て、太刀に手をかけ、皆に睨見ていはく、佐渡は何といふぞ。今もし一言を出さば、我必らず只一刀に試に決せん。舟師の一陣は我にあらざやと。そのいかれる眼ざし、光りかゝやきて炬のごとし。」(2ウ)

〔挿絵第一図(3オ)〕

高虎聞て大にいかり、一刀に心みんとは我これにおそれんやと。座中みな捕静め、高虎、物なのたまひそやとあつかひしかば、事故なく成たり。戸川肥後守、かたはらにして聞けり。しかるに肥後守は備前中納言浮田秀家の家老なり。人性武勇あり。そのかみ文禄元年、



挿絵第一図

朝鮮征伐の時、肥後守、陣屋をかまへて居たりしに、朝鮮の土民等おそれ逃る。肥後守がいはいはく、汝らをころすべきにはあらず。おそれるゝ事なかれとて、木札六百を出して分あたへ、此札もちらんものは爰に来るとも殺す事有べからずといふ。土民等大によるこび、その札を油紙につゝみ、頸にかけ(3ウ)て、心やすく入来る。四方の商人職人等、みな肥後守が陣屋にあつまりしかば、方に手づまることなし。材木炭薪魚鳥までも乏からず。かくて肥後守、陣屋を替て余所にうつり、その跡に别人屋渡りして居たりけるを、土民等しらで、木札を首にかけ、来りて肥後のくといふ。陣屋の者どもは、その子細をしらで、敵軍いつはりうかがふと心得て、をの

れら何をかいふ。肥後のくとは心得ずとて、みなとらへて殺す。これより朝鮮の士民等みなはいはく、日本人は虎狼なり。情をしらず。近づくべからず。その軍法さたまらずとて、おそれまどひて山ふかく逃くもるとかや。又古しへ、神功皇后三(一才)韓を平げ、新羅の地にあがり給ひ、弓の管をもつて大石のおもてに書つけ給ふは、高麗王は我が日本の狗なりと。その石今にありと。肥後守婦朝の後に人にかたりてはいはく、秀吉公、自朝鮮におもむき給は、軍法さびしく乱れざらん。しからば諸大將、何ぞ人をころす事、麻を薙倒ごとくにおほかるべき、あたら人数をおほくころしけるよとかりきと也。されば、高虎、嘉明が喧嘩も、戸川肥後守よく見聞て、浮田秀家にかたる。後に秀吉公聞て、感状を加藤嘉明に賜ふ。

大明の諸臣下僉議してはいはく、此度日本、二たび大軍(一ウ)をおこす事は、これ可馬石星が罪也。沈惟敬に何とかはからひ聞せて、あつかひを破りけん。石星は、沈惟敬が仕損じ也と責ければ、惟敬がいはく、日本のおこり来るは、朝鮮の無礼を数ところ也。大明の命をそむくにはあらずといふ。徐成楚これを難じてはいはく、軍兵数十万、海にうかふ事数千里、これ只無礼なるのみならんやと。諸臣下みなその罪は石星にありとて、とらへて牢獄に下し入たり。其後万曆廿七年の夏、つゝに死たり。朝鮮しきりに加勢を請といへども、大明打つべき兵乱おこる故に、諸軍兵疲れるしみて、その召に応せず。大明大に乱れさはぐ。(一才)

四月に、大明帝、すなはち邢玠をもつて経略とし、楊鎬をもつて經理とし、劉綎、麻貴を南北大帥とし、制東、浙江、四川、広東の軍兵をもよして朝鮮に加勢せらる。朝鮮国王李昭は、大明帝の勅命によつて新総督となる。すなはち左兵使成允門、防禦使権應銖をつかはして、慶州に陣とりて鳥嶺の敵をふせがしめ、右兵使金庇瑞を宜寧にきて、釜山浦の敵をふせがしむ。統制帥元均をもつて舟軍の大將となし、竹島、加徳の敵をふせがしむ。

秀吉公、使を沈惟敬につかはしてはいはく、速に朝鮮の全羅、慶尚、忠清の三道を日本の領知になすべしと也。(一ウ)大明帝は、沈惟敬はやく日本の軍兵を引とるべしと申せ。日比のあつかいはいかにしつると也。兩國より数責られて、沈惟敬すべきやうなく、たゞ忙然として居たり。

五月、加藤清正、すでに柳川調信を日本につかはす。六月に帰朝して秀吉公に謁す。秀吉公の給はく、朝鮮、わが言を聴かず。これ全羅、忠清の二道を其まゝ置故也。諸軍進て全羅道に入て、兵糧をあつめ、諸城を踏つづし、大にすゝみてせめ入べし。それもしかなはずは、まつ慶尚の城にかへり、固城を過て、西生浦に入つゝ、敵地ふかくせめつめ、力をつくして戦かひ、(一才)味方おほく死すともかへりみずは、必らず大功を建べし。若わが言にしたがはずは、汝らが妻子みな日本にあり。我みな隣にかくべしと也。清正、行長、聞て大におどろく。又調信にいはせけるやう、近日大明より大軍すでに

全羅にをしよす。そのいきをひ、更に手むかひ成かだしたと。秀吉公聞て大にいかりてのたまはく、往年、李如松が大軍を率して開城に陣とりし時、味方、片時に晋州を攻つふし、城主牧司を打とりぬ。今もつておそるべからず。浮田秀家は、宜寧より全羅にむかひ、毛利秀元は、慶州より密陽大丘を経て全羅にむかひ、両方より來打にせよ。清正、行長等、何ぞ明(6ウ)兵の大軍をおそるゝや。逢心かなとの給ふ。調信歸りていふ。清正、行長、おそれうやまふてうけ給はる。

沈惟敬は、両国より責られ、いかへんと案じけるが、朝鮮の僧惟政松雲を借て書を清正にをくりていはく、大明の軍將邢玠といふもの、七十余万騎を率して、すでに朝鮮におもむく。公等諸大将、はやく軍兵を引入てしかるべしと也。清正、その時は西生浦にあり。すなはちこたへの書をつかはす。松雲がいふ。大明の多勢来るよし。これ我がねがふ所なり。それ朝鮮の軍兵は弱く臆して、味方の兵にむかつては、楯をつき弓を引事かなはず。此故に、我まことにこれをあは(7オ)れむ。しかも今、大明の軍兵と合戦し、首を雜すてん事、麻を刈がごとく、一時に塵にし、朝鮮を打破りて直に旗を大明にすゝめ、ことごとく明兵を焼はらはん。此事偽ず。我身の幸何事かまさらん。唯、恨くは、明兵をそく来ることを。我軍をとゝのへて待なりといへり。惟敬、及び大明の兵、朝鮮人、ともに此書を見ておどろきさはぎて、武勇のほどをおそれ、いよく手あし

を空になし、安き心もなかりけり。

邢玠、もとより沈惟敬が表裏なる事をふかく悪み、これをとらへんとす。彼もし日本にはしりて、大明の有さまを敵にかたらんかともひうたがふて、先書(7ウ)をつかはして心を易くせしむ。沈惟敬も身の科に心の鬼をつくり、大明の諸大将をおそれうたがひて、釜山浦にはしりゆかんとするに、便なし。邢玠すでに楊元に三千余騎をそへて南原につかはし、呉惟忠、麻貴、及び朝鮮の軍將元均に心をあはせて、沈惟敬が釜山浦にはしりのがれんとするを防ぎ守らしむ。沈惟敬が手勢二百人あり。もし、惟敬が夜にまぎれてにげんかとおそれ、別兵二百人をつかはしてこれを替たり。惟敬、ひそかに郎從婁国安、張龍二人を釜山浦につかはし、小西行長に降人にならん事を望む。行長、すなはち柳川調信に五百人をそへて出し、宜寧といふ所に(8オ)いたりて惟敬をむかへんとするに、朝鮮の斥候、これををしとめてはしらせす。張龍は朝道より帰り、惟敬に逢て、はやく立のきてゆくべしとすむ。楊元聞つけて宜寧にいたる。沈惟敬、財宝を下人にとりもたせ、忍びて釜山浦にゆくに逢て、日本の事いかにせしと問に、惟敬こたへていはく、和ぼくの事はかなふべからずといふ。楊元がいはいく、其事叶まじくは、大明に行て邢玠にはすやと。惟敬がいはいく、我今一たび慶州におもむき、加藤清正に逢てあつかふてみる。卅日は過べからず。頓て帰らんといふに、顔の色変じ動転したる体也。楊元、それにげはしらんとす

る也と見とがめて、」(8ウ)軍兵をもつてとりかこみ、惟敬か馬を引もどし、明に帰りぬ。邢玠すなはち明帝に申て牢獄に入をく。時に万曆廿五年也。同廿七年九月廿四日、つゝに誅せらる。

從三位中納言筑前守小早川隆景卒す。隆景は大膳大夫毛利元就が子、中納言輝元には伯父なり。輝元すでに秀吉公に属して、後に秀吉公、筑前国を隆景に給はる。隆景思はく、我は秀吉公に大國を給はるべき好なし。これわが意にあらずと。すなはち秀吉公に白ていはく、我ねがはくは、金吾中納言秀秋を養まいらせ、我死して後に筑前國をゆづり奉らんと也。秀吉公大によろこびて許給ふ。これより後に」(9オ)隆景は、秀吉公の大恩をかうふる事厚し。五大老の數にくはへられ、六十三歳にして卒す。遺言していはく、天下乱るゝとも輝元に与すべからず。只わが領國を守り居るべし。その故は、毛利家、もし天下をとるべき勢力あらば、さもあるべし。しかれども、そのいきをひなき事を我よく察したり。後々、もし領知の國を出て、軍をせば、國崩れ身ほろぶべし。此事忘るゝ事なかれ。うたがふ事なかれと也。此後関が原陣のとき、隆景のこと業、果して驗有り。

七月、沈惟敬は、楊元が我をとらへしことをうらみ、郎從婁国安を小西行長につかはして告しらせける。南原」(9ウ)の城は、楊元及び全羅道の兵馬節度使李福男が守る所也。城中無勢なり。諸大將と合せ責なば、城は落べし。南原の地形は、東に雲峰島嶺のけはし

きあり。南に三浪大江のふかきあり。その道は金海、竹島に通す。これ朝鮮要害の地なり。足下の軍兵をこゝに置べし。その右のかたに、閑山島あり。邢玠すなはち遼東の軍兵三千人をこめて守らしむ。陳患衷は二千余騎にて全州にあり。朝鮮の軍將金元瑞、李元翼は、雲峰にあり。權傑、元均は閑山島の辺にあり。みな南原城の加勢なり。足下もし軍兵をほくこれらを防がせて、後に南原をせめられれば、一時の内に大」(10オ)功をなさんと也。行長もとより思ふところ也。すなはち諸大將に評議して南原城をせめんとす。

朝鮮の軍將元均と、大明の軍兵と、相図をさだめ釜山浦の城をせめんとす。小西行長、これを聞て軍勢をもよをして元均が舟軍の兵をうちらしすゝみて、閑山島をせめとる。これより日本舟軍の便よし。此故に舟ををしすゝめて光陽豆恥津に乱れ入たり。

八月、諸大將すでに南原の城にむかふ。全羅、慶尚、忠清の三道よりしてすゝむ。一手は浮田秀長を大將とし、小西行長先陣たり。島津兵庫頭義弘、蜂須賀阿波守家」(10ウ)政、長曾我部土佐守元親、加藤左馬助嘉明、生駒謙政守等五万余騎相從。一手は、毛利秀元を大將とし、加藤清正先陣たり。黒田長政、浅野幸長等五万人相したがふ。慶州を出て密陽大丘を過て、全義館に入たりしが、朝鮮王城にこもる大明の軍兵と戦かはんとす。

中納言秀秋は、釜山浦にありながら、山口玄蕃允、伊藤雅楽助、南部無右衛門等八千人をつかはして、秀元、清正とおなしく忠清道

におもむく。權慄、李元翼等は、雲峰に陣どるといへどもふせぎ戦かふに及ばず。みな東境に逃たり。秀家、行長等、備をたて、南原城をせめんとする時に、鬪どりして全州にむかつて、南原に来る加勢どもの「(11才)道をとりにきらんとす。義弘、嘉明、鬪をとり得て、軍兵を率して全州にむかふ。この故に陳愚衷等のもがら、南原をすくふことかなはず。秀家、行長四万余騎、同時にすゝみて南原をせむるに、城主楊元及び李福男、かたく守り打はたす。鉄炮の首は百千の雷の鳴がごとく、射はなつ矢は五月雨の篠をつきて降るがごとし。息をもつがせず、四日の間攻たりけれども、固ふせぎて落べきやうなし。こゝにをひて、小西行長等せめあくみて、をの陣を引しりぞきて、遠攻にいたす。城中此間、急に攻られて機つかれ心屈しけるを、今は心安しとて、をの城中の軍兵ども、鎧甲をぬぎて臥たり。夜明がたに、「(11才)行長軍兵をすゝめ、南門をせめ破りて、急に突入りけり。秀家、元親、家政、高虎、をの陣とせめよせ城にかけ入れれば、楊元は帳中に臥て、いまだ起もあがらざりしが、大におどろきあはて、衣をだに着隙なく、盤礴に跌にして逃出つゝ落行ければ、李福男は打死す。秀家、行長等、城中に乱入て切ふせ突ふせ首をとる事三千余級、生捕ものまたすくなからず。すなはち、人を釜山浦につかはし、書を日本にをくる。行長が武威大に振ひけり。

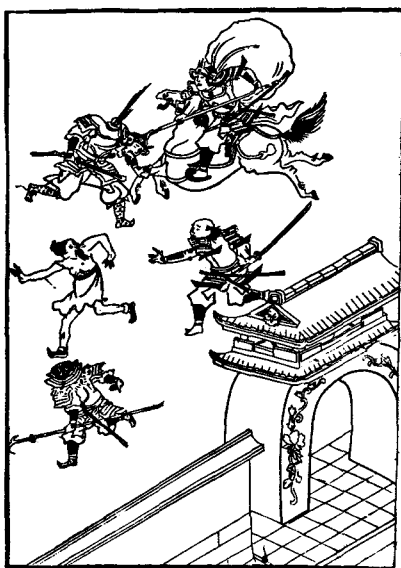
陳愚衷は全州にありけるが、義弘、嘉明かをしよせ来るを見て、南

原の城に加勢することかなはず。」(12才)

〔挿絵第二図(12才)〕

かゝる所に、南原すでに落て李福男打死せしと聞えしかば、全州の士民、おどろきあはて資財雜具をとりかくし、妻子をたづさへてにげまどふ。陳愚衷、是を制してとどめんとす。士民等、大にいかりおこりて、急に全州を攻つゝ兵糧庫に火をかけ、四方に逃散たり。陳愚衷おどろき城をすてゝ逃ければ、日本の兵、すなはち全州をとり、兵糧鉄炮弓矢等をあつめたくはへて、暫らく休息す。

邢玠は、南原全州の城落たりと聞て、陳愚衷が罪なりとて明帝に奏達す。又朝鮮国王李哈を数ていはく、日本すでに朝鮮をうつ事は大



挿絵第二図

明の恥なり。」(13オ) 此故に明帝、すなはち軍兵数十万騎をつかはし給ふ。久しく在陣して雨露にうたれ、身を苦しめ心をなやますといへども、李哈を初めてその臣下等、更に出て戦かはんとおもふ心もなく、只大明の軍兵にのみ打任せて、その身は引こもりてある事、これ主辱めらるれば臣死すといふ語にそむく。此たび南原全州の敗北は、みなこれ李哈があやまち也と。これによりて李哈おそれおとるきて、朝鮮八道の兵を催して邢玠か命にしたがふ。

九月、毛利秀元、黒田長政等、軍をすゝめて全義館にいたる。全義館は王城を去事遠からず。時に副総(13ウ)兵副將軍解生といふもの、日本の軍兵の直に王城に責いらんことをおそれて、わが手の軍兵を稷山、水源の両所に分ちつかはして、これをふせがんとす。黒田長政、先陣をつとめてすゝむ。朝鮮の軍兵等は、日本人の武勇をおそれ、城を守りて更に出て戦かはず。此故に秀元等むかふ所に敵なし。長政たちまちに解生と相戦かふ。長政が家臣栗山備後守、後藤又兵衛、五十余騎にて解生が陣にかけ入、おもてもふらず切てまはる。参将楊登山、遊撃牛伯英等、来りくはりて、栗山、後藤をとりかこむ。栗山、後藤、すこしもおそれず、解生、登山、伯英の三大将と、東にうち西に突、左にめぐり右に返し、(14オ) ついに陣みを出て万死をのがれ、一生の武勇をあらはす。黒田長政これを見て、二千余騎をすゝめて打てかゝる。毛利秀元が先陣もおなじくつゞいてすゝみけり。解生等、打なびかされて、かたふき逃る。

李益喬、劉遇節、兵をすゝめてはせ来る。解生等、力を得て又取てかへして戦かふ。長政大にこれを破りける所に、秀元等の諸大将、備をたて、後よりをし来る。解生かなはしと思ひて兵を退て引てゆく。日すてに暮かゝりければ、長政等も追かけずしてとゞまりぬ。十月、麻貴將軍、すでに李如梅をつかはして、筑紫上野介、久留米秀包がこもりし星州谷城をせめし(14ウ)む。南部右衛門等、星州をとりはらひて、退道にしてはしたなく李如梅に行合て戦かふに、李如梅かなはずして引退ぞく。日本の軍兵等、寒氣甚しきをもつて、兵を納て守り居る。

十一月、邢玠すでに軍兵をとゞのへて鴨緑江を渡り、朝鮮王城に入て、楊鎬、麻貴と軍評定す。日本の諸大将は、大明の軍勢大にせめ来ると聞て、斥候をつかはして其有さまを見せしむ。此時、小西行長は松島にあり。加藤清正は蔚山にあり。清正蔚山に城をつくらんとして、暫らく普請の事をいとまましむ。其後清正、また水辺の諸城をかまへんとして、西生浦に行(15オ)て機張に逗留す。加藤清兵衛は蔚山にとゞまり、毛利秀元が軍兵相くはりて守る。大明の軍兵みな思はく、清正蔚山にありと。此故におそれてをしよせんとせせず。中納言秀秋は釜山浦にあり。をよそ日本の軍兵、朝鮮に在陣するもの十三万余人也。

邢玠すでに軍兵を分て三とす。左の軍は、副総兵李如梅一万三千六十余騎、盧得功、董正誼、茅国器、陳寅、陳大綱これにしたがふ。

中軍は、副総兵高策一万一千六百九十余騎、祖承訓、頗貴、李寧、李化龍、柴登科、苑進忠、吳惟忠これにしたがふ。右の一軍は、副総兵李芳春、解生、一万一千六百廿余騎、牛伯英、(15ウ)方時新、鄭印、王戡、盧繼忠、楊万金、陳愚聞これにしたがふ。彭友徳、楊登山、樞賽、張維城等は遊軍たり。監軍軍奉行は監察御史陳效なり。朝鮮の軍勢もまた三軍の中にくはゑる。鉄炮一千二百四十四位、火箭十一万八千支、鉄炮の薬六万九千七百四十五斤、大小の鉛玉百七十九万六千九百六十七、これ遼陽分守張登雲といふもの奉行す。其外に、三眼銃、鉄鑿、眞銃、悶棍、火砲、火筒、団牌、仏郎機などいふ大筒、石火箭、さま／＼の兵器をあつめ、軍法尤きびしくして、いかなる通力武勇ありともおもてを向ふべくもおほえず。十二月、邢玠將軍、壇にのほり天地をまつり、諸大將(16オ)をいさめて数万の鉄炮をつるへはなす。その有さま、敵重也。かくて楊鎬、麻貴、軍兵三列をすゝめて慶州におもむき、蔚山をせめんとなはち高策、吳惟忠を彦陽梁山につかはして、蔚山と釜山浦との通路をとりきる。安戸備前守、浅野左京大夫幸長、大田飛驒守は、蔚山にこもらんとて彦陽に陣どり、まづ斥候をつかはして敵の体たらくを見せしむるに、高策、吳惟忠が兵、これを見つけて蟻のごとくあつまりて、斥候を打ころしけり。幸長いかりていはく、今すてに蔚山に入といふとも、斥候のおほく打ころされしを見ながら、(16

ウ) 敵にもあはずして帰ば、後の嘲なりとて、打てかゝらんと馬を進む。安戸、太田、これをとめて、是誠に武士の本意なりといへども、明兵は大軍成べし。我ら小勢をもつて打かゝらんは、卵を石に投がごとくならん。只速に蔚山に入て然るへしと。幸長、今年廿二歳、勇氣はなはだ盛也。安戸、太田、か諫を用ひずしてはいはく、我いま敵をみずは帰るべからずとて、みつがら旗をとつてすゝむ。安戸、太田も打すてがたくて共にすゝむ。明の兵、その小勢なるをみて、真中にとりこめ一人もあまさじと打てかゝる。幸長、安戸、太田、大にかけやぶりはせ出たり。明兵、手しげく追かけゑるを、引返し／＼その道三里が間に数度たゝかふて、幸(17オ)長教ヶ所の劊をかうふり、蔚山の近辺にしては、すでにあやうかりける所に、幸長が郎從龜田大隅守ふみとゞまりて戦かひ、敵の大將を打とりしかば、敵軍乱れまどふ。加藤清兵衛、城の門をひらき迎へたり。幸長、太田は、蔚山に入たり。安戸備前守は大明の軍兵にをしへたてられて、城に入事かなはず、やう／＼閑道より入たり。加藤清兵衛、城中の手賦し、幸長は大手を守る。毛利秀元は兵を分て、島山を守らしむ。太田飛驒守は遊軍としていつかた也ともあやうき所にくはゝらんとす。城中糧すくなし。近郷の土民等は、大明大にせめよするを見て、みな妻子をつれて城にこもる。此故にいよ／＼兵糧ともしかりけり。

(挿絵第三図(18オ))



挿絵第三図

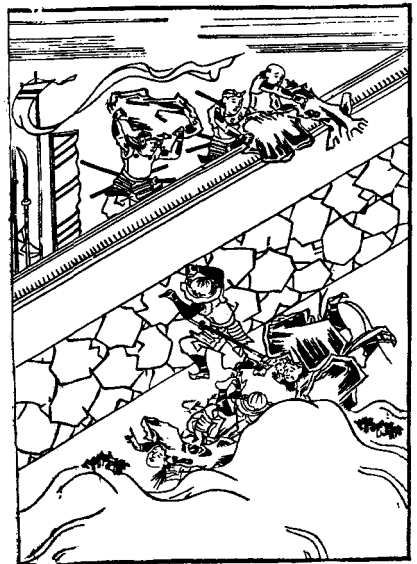
李如梅、楊登山、その軍兵を率して蔚山を攻る。遊撃擺賽は五百余騎にて城下につめよせ、急にすゝむ。城中鉄炮を打たてて弓を射出し、関のこゑおびたゝし。城中一万余騎、門をひらきて喧とかけ出つゝ、手しげくたゝかふに、擺賽打たれて崩逃る。城兵勝にのりて追かくる。明の兵、これをとりまきけるを、四方八面追まくりて、軽々と引入けり。城の兵四百余人うたれしかば、明の兵は三千余人うたれたり。蔚山、島山の間、大河あり。李方春、解生、此川に舟をうかへ漕めぐりて近郷の在家を焼はらふ。此煙のまぎれに城にせめいらんとす。城中これを察して「(18ウ) 急に鉄炮をはなつ。李方春、解生が舟、覆て四五そう沈みければ、これに乗たる明の兵

おほく溺死す。方春、解生わづかにのがれて帰る。
加藤清兵衛、使者を機張につかはして、清正を蔚山に召入はやとて、その使をえらふ。幸長が郎従木村頼母がいはい、我ゆくべしとてはせ出ていたり、清正に逢て此よしいふ。清正がいはい、速に小舟を用意せよ。我日本を出し時に、浅野弾正すでに子息幸長を我にあづけたり。幸長死せば我恥なり。二たび日本に帰りて弾正に対面すべきや。我も同じく死して契約を黄泉の下にとゞげんとて、五百余騎にて蔚山(19ウ) 山におもむく。
麻貴、茅国器 又大軍にてせめよせ、柵を引のけ壁を打破り、城にのらんとす。城中鉄炮をもつてふせぐに、あだ矢なし。よせ手おほく打ころされしかば、かなはずして引しりぞく。
麻貴また大軍をもつて島山をせむる。島山は岩石そばだち、道羊腸にしてのぼりがたし。日本の軍兵、尾崎に立ならび、鉄炮を打出す事雨のごとし。よせ手のぼりかねて引しりぞく。麻貴、怒をなして軍兵を上げまし、又打てのぼりけるを、城中をり立て大石をまろばし、大木を投かくるに、よせ手これに「(19ウ) あたらじと前なる兵を楯になして色めき乱れたる所を、又鉄炮を打かくれば、あだ矢なくあたりけるほどに、引のかんとすれども後よりをしかくる。前にすゝめば打ころされ、痛手をひ、一人も残るべきともみえず、麻貴せめあぐみて引退けるに、大軍のこりすくになに成にけり。
加藤清正、五百余騎を率し、舟十艘にとりのつて蔚山にいらんとす。

大明の兵、清正が武勇におそれ、打とめんとするものなし。清正、白銀の帽子ぼうし甲かぶとを着て長刀をかいこみ、舟ふねはたに立て軍兵をとゝのへ、蔚山うりやまの城にしつゝと入たり。城中大によるこびて、勇氣ゆうき日比に十倍せり。」(20オ) 大明の軍兵多勢をもよをし、二方より一同にすゝみ、急にせめのぼらんとて、蟻あちのごとくあつまりて城の石垣いしがきに付たり。城中、清正が来りしにいよゝ力を得て、大にいさみ、大石大木を投げかけ、鉄炮を雨雹のごとく打出しけるに、よせ手の大勢甲を打われ、頭を打くだかれ、手足を打られ、半死半生に成もの数しらず。打ころさるゝ者おほかりければ、楊鎬やうがう等相議しはいはく、此城を力責にせんとすれば、軍兵おほく打れて今に仕出したる事ひとつもなし。城中は水の手自由ならず。兵糧へいりやうおほからず。只遠攻とんこうにせば、味方の人数をつるやさずして城はをのづから落べしとて、城のせめ口を引のき、陣やをきびしくかまへて遠攻にこそしたりけれ。」(20ウ)

〔挿絵第四図 (21オ)〕

城中これに気屈きまぐつし、そのうへ水の手をとりきられてともしくなり、ひそかに池水を汲て濁にごをやしなふ。池中には死骸しかいおほく、その水は血ちに混まじて穢けがらはしけれども、せめてこれなくはいかゝせん。すてに又兵糧へいりやうつきて牛馬をころして食す。城中ひそかに忍び出て、大明の軍兵の死したをれたる腰こしをさぐり、わづかに焼米やまい、牛の多あふりなどを拾ひろひとりて飢うをたすかる事もありけれ共、中々なかなか堪忍たへしのぶへきやうもな



挿絵第四図

し。清正すてに大明の兵を誘あそかんために、使をもつて楊鎬やうがうに和ぼくせんといふ。楊鎬やうがう、偽いつはりて和ぼくをなし、対面して生捕なまとらつゝ、日本の軍兵みこしを塵ちりにせんとす。浅野幸長あさのゆきなが (21ウ) これを慮おもんばかりて、かたくとゝむ。楊鎬やうがう、其誘あそかたき事をいかりて、急に城を攻おとさんとするに、寒気はげしき故に諸軍うけがはず。

同三年正月朔日、小西行長三千騎を率し、舟を順天じゆんてんよりし出して蔚山うりやまの城をすくふ。毛利秀元、中納言秀秋、黒田長政、三万騎を率して蔚山うりやまの後詰ごごづめをせらる。四国の軍兵二万余騎、はせ来りて蔚山うりやまの近辺に陣をとる。家々の旗はたをなびかして風にひるがへす。軍兵野山にみちくへおびたゝしともいふはかりなし。楊鎬やうがうこれをみて大に

おどろき、色をうしなふて、策はかいかにもすべき心もなく、周章しゅうしやうふためき我前われまへ（22オ）にと迷帰まひかへる。清正これをしらす。此故に出で追かくる事なし。次の日、これをしりて城を出て追かくる。呉惟忠ごゐちゆう、茅固器ちやうこ、命をすてゝ返し合せせぎけるにこそ、大明の軍兵は傍々たうたうのがれ帰りけれ。されども弓鉄炮馬旗等をすてたる事、数しらず。路みちととりおさめ車にのせて持て城に帰る。楊鎬は、なをながして世のわらひ草となりぬ。

邢玠けいがい、すでに楊鎬が蔚山を落し得ず、日本後詰の軍兵をおそれ逃たる事を見て大に怒り、諸軍を朝鮮の王城にあつめて、かさねて大軍をあけて蔚山をせめんと相はかり、明帝に申て楊鎬が官をけつりぬ。」（22ウ）

二月に、劉綎りうゑん、陳璘ちんりん、張榜ちやうぼう、鄧子龍とうしりゆう、藍芳威らんほうゐなどいふ兵を大将として、軍兵を率して朝鮮に入たり。巡撫使万世徳ばんせいとくを楊鎬に代て經理とせらる。

邢玠、すなはち李如梅りよくばいを中路の大将とし、麻貴まきを東路の大将とし、劉綎を西路の大将とし、陳璘を水軍の大将とし、をの／＼軍兵をおけて諸城を守りて日本の兵をふせく。

三月、秀吉公、若君秀頼わかしゅを携たづまひて醍醐の花見におもむき給ふ。北の政所まじ、女房達、みなめしつれらる。去ぬる正月に、徳善院玄以とくぜんいんげんゐに仰付られ、醍醐の院房を修理せしめらる。すでに今日出立給ふ。醍醐にいたり三宝院に入（23オ）給ひければ、御ともの衆みな帰らしめ、

暮がたに来るべしと仰せ付らる。北の政所、三宝院より歩あひにて所々をめぐり見給ふ。その道の両方に埒あちを結、五色の緞子の幕を張せ、秀吉、秀頼、北の政所、女房達ばかり也。男たる者は一人もめしつれず。此故に諸大名、所々に茶屋をかまへて興をもよをさるゝも、みなその妻を亭主とせられたり。秀吉立入、茶酒を飲のみてたのしみ興きんぜさせ給ふ。勅使来りて花見の興を賞し給ふ。其外、撰家せんけ、清花せいけ、みな使を奉り、諸大名、京境の名ある輩は、酒肴をさゝげて山のごとし。勅使は中納言兼勝也今日風静に雨ふらず、天くもらず、塵たゝず。

春の空うらゝかに花の匂ひかうばしく、梢こずえに来鳴鳥の声（23ウ）谷にひゞく。泉の音までも千代万代の哥をとなふかといとめでたかりし花見也。増田右衛門尉長盛が茶屋には浴室をかまへたり。秀吉公、衣を脱て浴給ひ、御膳をすゝめ奉る。別に一の家をかまへ、扇あふぎはり子、ひるな、畳紙たたみ、人形にんぎやう以下の商売物の棚をかざり、くれなの網あみに鈴すずをつけて花の枝にかけしかば、松風落まつかぜおちて鈴を鳴し、群鳥はおどろきとぶ。谷水をうけたためて池をつくり、池に小舟をうかへ、人形をあやつりて漕こめくらす。これ秀頼をなぐさめまいらするため也。新庄入道東玉が茶屋は、昔むかし生たる岩のはざま、朽木をたよりにしつらひ、柴の垣、竹のあみ戸、物さびたる有さまなり。」（24オ）

〔挿絵第五図（24ウ）〕

〔挿絵第六図（25オ）〕

秀吉公、内うちに入いりて焼餅やきもちをきこしめし、棚たなに有ける瓢箪ひょうたんの酒を飲給へ



挿絵第六図



挿絵第五図

ば、茶屋の亭主、茶をまいらせその価をつよく乞てゆるさず。秀吉公大に興をもよをし給ひ、只今は何もなし。帰らばやがて算用すべしとの給ひしを、只今給はらずは帰し奉るまじとて、御手をとりて引入奉れば、秀吉公大によるこび給ひ、すでに酒宴はじまり教刻に及びて帰らせ給ふ。次の日、秀頼の御かたよりは銀式百枚、小袖十重、北の政所より鳥目百貫、羽二重廿疋、秀吉公より千六百石の寺領を三宝院につかはし給へり。

加藤主計頭清正、毛利秀元等の諸大将、蔚山の城〔25ウ〕の要害堅固ならずとて、修理経營あり。小西撰津守行長等は、大明百万騎の軍兵をさしむけ順天の城をとりかこむべきよし風聞ありと聞てはく、若大軍にかこまれなば悔ともかへるべからず。速に順天を去て釜山浦にこもらんといふ。加藤左馬助嘉明すゝみ出ていはく、いまだ敵の旗をだに見ず。聞述にするならば人の嘲のかるべからず。かた／＼は左も仕給へ。某にをひては残りともまらんといふ。諸大将、また嘉明をすてゝゆかんでも道ならずと、評定まち／＼也。此由、蔚山に聞ゆ。清正、秀元、すなはち安楽寺の僧惠瓊を順天につかはしていはく、順天を退て釜山浦にこもらん事、まづ〔26オ〕秀吉公にうかゞひて定られよと也。行長、嘉明、此義しかるべしとて、使をもつて秀吉公へ白す。秀吉公大にいかりてのたまはく、大明の大軍来らば来らんまでよ。何ぞおそれて城を開退べきや。要害よくして固守るべくは、大軍といふ共ふせぐに憂なかるべし。秀秋、秀

家、秀元、及び四国の軍兵は、まづ帰朝すべし。九月に又渡海せしめんと也。時に五月也。

六月に、秀元、秀家帰朝して伏見におもむき、秀吉公に謁す。

頃年、朝鮮在陣の諸大将、その切とる敵の首数を、みな鼻をきり耳を切て日本につかはす。秀吉公、「(26ウ)その手輕き事を賞し給ふ。首数を奉るには、鼻耳若干としるしをくる。秀吉公、これを都の東大仏殿の辺に埋ませ、耳塚と名づけらる。その後、朝鮮人來りし時、かの塚の下にいたり祭文をよみて吊けり。此輩は死して国恩を報ぜしなりといふて、涙を流すものおほかりし。

七月に大明の軍將劉綎は、水源といふ所に陣とり、順天をせめんとす。まづ小西行長をたばかり生捕て猛威をふるはんとたくみ、呉宗道といふものを順天に遣して、和ぼくの事をいはしむ。行長、初めは疑ひけるが、呉宗道弁舌をつくし、誠がましく云けれ」(27オ)ば、行長心まよひて対面の地をさだめ、和ぼくの日をきはむ。劉綎が陣中に日本人あり。ひそかに順天に來りて、此事偽の策なりと告たり。行長大におどろき、その約義を變す。監軍陳效、すなはち劉綎が謀つたなく泄易き事を責る。劉綎大に愧けり。

八月に、軍將麻貴、すでに頗貴、牛伯英等を率して温井といふ所に陣とり、蔚山にむかふ。然れ共、清正が武勇におそれてせめかゝらず。清正も城を出す。兩軍相むかふたるのみ也。

島津兵庫頭義弘、その子又八郎忠恒と号す。一万余騎を率して諸城

をかまへて守る。新寨を居城とす。」(27ウ)新寨は、三面は海にして一方は陸につゞき、望津、永春、昆陽の三ヶ所の城、その前に鑿たり。金海、固城の兩城は、その左右にかまへ、東陽といふ所に兵糧おほくつめをき、又よき兵を泗川の砦にこめてのち、陝州、宜寧、咸陽、高靈などいふ村里をかすめとり、打やぶる。大明中路の惣大將軍一元は、高靈、晋州に出張せしかども、義弘が武勇に懼かり、城の要害の堅固なるをみて、更にせめんともせず。

十八日、前関白太政大臣一位豊臣秀吉公、伏見の城にして薨じ給ふ。年六十三歳なり。その遺言には、我死せば暫らく隠して沙汰すべからず。浅野弾正、「(28オ)石田治部少輔、はやく筑紫におもむき朝鮮の諸將を帰朝せしめよ。もしそれ軍兵引とりがたくは、得川殿、及び利家、よく智謀をめぐらし給へ。十万の軍兵を異国の土になす事なかれといひをはりて、息たえ給ふ。洛の東南のかた、阿弥陀が峰に葬れし、鎧甲太刀を棺に入たり。木食興山上人その事とりまかなひ、墓をその嶺につき、祠をその麓にかまへ、并に家をつくりて卜部氏秋原某を神主とす。其外禰宜等あり。其後月忌にいたるごとに妙法院にして諸宗の僧徒に齋をまうけ、聖護院門跡道澄後に照院を大仏殿の住持とす。浅野弾正長政、石田治部」(28ウ)少輔三成、増田右衛門長盛等、みな髪を切て恩を報す。

九月、董一元は晋州に有て謀をめぐらし、新寨をせめんとす。時に一人の女ありて新寨より出たるを、芽国器が郎従これをとらへた

り。かの女、櫓をとり出してしめす。そのおもむきは、此女まきに虜となりて日本に渡らんとす。吾はなはだあはれみみて質をいだし贖、故郷に帰らしむ。大明の軍兵、そのあはれみをたれて、殺害する事なかれとなり。その尾に、吾姓を知とならば、令公の後埋児の父。吾名を問は有或の口、無手の按と書とどめたり。諸軍士、更にその心を解ものなし。時に諸葛鏐といふもの、これを解ていはく、令公の(29オ)後は郭氏なり。口の中に或あるは國の字也。按に手なきは安の字なり。思ふにこれ郭國安なるべしといふ。軍將史世用、茅国器、ともに聞いていはく、郭國安は今すでに日本の軍中に入り。これ我らに新寨の城を破らせんため成べしとて、朝鮮の商人三人をもつて史世用が書をもたせて、望津に行て、郭國安に逢たり。約していはく、今月廿日に、望津にある兵糧庫に火をかけて焼べし。其時我ら川を渡りて城をせめんと也。茅国器、その日軍兵を率し川を渡る。日本の兵これを渡さじとふせぐ所に、望津の城焼あがる。日本の兵、城に引入て火をけさんとす。茅国器、勝の(29ウ)りて望津にせめ入て火をかけたなり。董一元は、軍兵をつかはして永春の城を破り、近郷を火はらふ。その夜、又急に昆陽をせむる。島津が軍兵大にはたらきて、よせくる敵を切ふせなきたをす事おほしといへども、大軍なれば絆とせせず、つゝにせめ破りしかは、日本兵の兵とも泗川の城に引こもる。

董一元は謀をめぐらし、茅国科といふものに黄金、絹布をもたせ、

新寨の城につかはし、島津義弘にあたへて和ほくの義をいふに、義弘したがはず。その金帛を返しけり。董一元は廿八日の夜半に泗川につめかけたなり。城中には島津が兵三百騎許あり。大同驍將李寧、一(30オ)陣にすゝみ、城下にいたりて打ころされ、大明の後軍しらげてみゆ。董一元、大軍をもつてせめかゝる。城中加勢を新寨に乞ふ。その間に城の兵三百騎打て出つゝ戦かふに、驍將盧得功、鉄炮にあたりて死けり。城兵勝にのるといへども、董一元が大軍つゝに城に入て火をかけたなり。島津が兵五六百騎、泗川に加勢すべしとてかけ出たり。義弘とどめていはく、泗川の軍兵をすてん事は口惜けれども、かの大軍勝にのりて此新寨にをしかけなば、味方敗北すべし。只陣をかためて守るべし。かけ出る事なかれといふ。義弘が家老伊勢兵部少輔貞昌、馬をさせて泗川より落来る。兵をむかへて新寨に帰る。大明の(30ウ)軍兵、東陽の兵糧庫を破て新寨にせめよせけれ共、義弘出合す。夜に入て、董一元いかと思ひけん、泗川に引しりぞく。

十月朔日、董一元が命によりて、茅国器等新寨をせむる。茅国器、葉邦榮、彭信古、すでに城下につめよせ木楨をもつて城門の扉をこち破らんとするに、木楨折て火出つゝ、鉄炮の葉にもえつき黒煙になりしかは、大明の奇手焼ころさるゝものおほく、乱れさはぐ所を、島津義弘父子打て出つゝ、堅横さまに打てまはるに、彭信古が三千余騎、みならたれてわづかに五六十人になりて引しりぞく。其外、

茅国器等が兵一万人すゝみける」(31オ)を、義弘五千よ騎、大にかふに、諸軍みな打なびかされて落行けり。董一元、諸將をばげまし、又をしよせたり。中軍の大將徐世卿、生どられて殺されしかば、大明大に敗北し、死するもの数しらす。義弘軍兵を軽々と城に引あげ、打とる所の首三万余を、鼻をそぎて大樽十ヶに入て日本につかはす。これより大明朝鮮の兵ども、いよ／＼石曼子が武勇をおそれて戦かふべき心なし。

石田治部少輔、浅野弾正は、大権現の仰をうけて筑前博多にくだり、使を朝鮮につかはして秀吉公の事を告て、諸大將の帰朝をもよをす。郭國安聞つけて、大明に「(31ウ)告越たり。しかれども、義弘が武勇におそれすゝみ来らず。

大明、すでに日本の軍兵帰朝すべきよしを聞て、陳璘をもつて舟軍の大將とし、陸路五千余騎、水兵三千騎を相をへ、副総兵陳蚕、鄧子龍、遊撃馬文煥、その兵一万三千人、軍舟数百艘にとりのり、忠清、全羅、慶尚三道の濠に陣とりて、日本の兵をふせぐ。

清正は蔚山を出、行長は順天を立、義弘酒川を打出つゝ、みな帰朝せんとす。陳璘大によるこび、これ日本の軍兵を鑿に殲べき時節いたれりとて、鄧子龍及び朝鮮李統制をつかはし、その兵一千余騎、鼓金」(32オ)に鑿して日本の兵を遮とす。島津義弘は帰り去ぬ。小西行長と戦かふ。鄧子龍、二百人を率して小舟にのりてをしまはしけるが、石火矢にあたりて舟打くだけ、大將ともに一人も

残らず死けり。行長が兵、勝にのる。李統制、舟を漕よせしが、又切ころさる。陳蚕等、行長が舟をとりまきて戦かふ。行長打やぶりにて加徳にいたり、義弘に逢たり。大明中軍の大將陶明宰も、此時に打死す。

清正、行長、義弘、直茂、幸長等の諸大將、みな帰朝し、博多につきて石田三成に対面す。加藤清正は、まづ名島におもむき、浅野弾正に逢て打つて博多に来る。」(32ウ)次の日、石田、浅野は諸大將に在陣の苦勞を感じ申て、秀吉公の遺言遺物の事をかたりければ、諸大將みな涙を流して悲しむ。石田、浅野申て曰、各伏見に來りて後、本国に帰り、七ヶ年このかたの在陣の苦勞を慰給ひ、来年上京の時に、互に会合して心を慰まんと。かくて各伏見にいたりて、大権現に謁し奉りて、みな本国に帰らる。

大権現は、島津義弘が軍功を感じて領知四万石を加給はる。時の人うらやみけり。

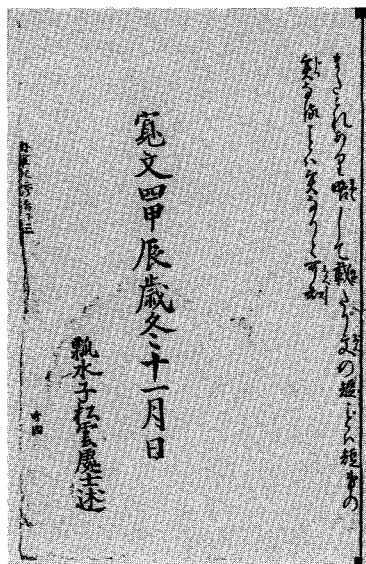
同四年二月五日、加賀大納言利家、備前中納言秀家、会津中納言景勝、安芸中納言輝元、徳善院僧正」(33オ)法印玄以、浅野弾正少弼長政、増田右衛門尉長盛、石田治部少輔三成、長束大藏太輔政家、連判誓詞をもつて、大権現にさゝげて謝し奉る。これ風聞する事ある故に、堀尾帯刀吉晴、中村式部少輔一氏、生駒雅楽助、しばしめ給ふ所也。大権現これを聞給ひ、すなはち九人に誓紙せしめ給ふ所也。

四月十八日、勅して秀吉社に豊国大明神と諡を賜ふ。
 本朝將軍記は、古來書伝にするところ、粗考て集著せり。近代の雜記等、その外云つたへし事、(33ウ) またこれあり。略して載たり。文の短ことは短、事の実なることは実なりと可知。

寛文四甲辰歲冬十一月日

瓢水子松雲処士述 (34オ)

(刊記写真)



〔付記〕 本稿をなすにあたり、翻刻および挿絵の影印の御許可を下

さいました東京国立博物館に深謝申し上げます。